

令和2年度

修士論文

雑誌『住宅』を通してみる日本の近代住宅の内玄関に関する研究
～出入口の相互関係と外観の構成に注目して～



指導教員 浅野聡教授
大井隆弘助教

三重大学大学院工学研究科
建築学専攻
大河原剛

目次

第1章 序論

- 1-1 研究背景
- 1-2 既往研究と本論の目的
- 1-3 雑誌『住宅』について
 - 1-3-1 発行母体「住宅改良会」について
 - 1-3-2 発行時期・号数
 - 1-3-3 編集内容・方針
- 1-4 研究方法
 - 1-4-1 研究対象
 - 1-4-2 分析方法

第2章 分析

- 2-1 平面方向の分析（数量・配置について）
 - 2-1-1 対象作品数と内玄関を保有する作品数の割合
 - 2-1-2 住宅規模別にみる内玄関を保有する作品数の割合
 - 2-1-3 内玄関の配置について
 - 2-1-4 表玄関・内玄関・勝手口の距離関係について
- 2-2 立面方向の分析（外観構成について）
 - 2-2-1 外観について
 - 2-2-2 建具について

第3章 総括

- 3-1 各節の分析結果
- 3-2 内玄関の配置と外観構成との関係
- 3-3 内玄関の配置の多様化の意味について

第1章 序論

1-1 研究背景

1-2 既往研究と本論の目的

1-3 雑誌『住宅』について

1-3-1 発行母体「住宅改良会」について

1-3-2 発行時期・号数

1-3-3 編集内容・方針

1-4 研究方法

1-4-1 研究対象

1-4-2 分析方法

第1章 序論

1-1 研究背景^{*1}

明治以降、日本の住宅は西洋文化の導入を背景に住宅装置や生活様式に大きな変化が起きる。その中で大正・昭和戦前は住宅の近代化を目指す運動が活発になり、啓蒙活動もより具体的なものになる。さらに主婦と子供の生活が重視され、接客本位の住宅から家族本位の住宅に変わる。より詳しく述べると、大正4(1915)年に国民新聞社(今日の東京新聞社)主催の「家庭」をテーマにした最初の本格展な博覧会が上野公園不忍池畔を会場に開催され、社会の変化に伴う衣食住の新しいあり方を具体的に示したことを皮切りに家庭生活の近代化が重視されはじめた。大正9(1920)年には、文部省の後援により「生活改善同盟会」が国によって組織された。そこでは「住宅改善の方針」として6項目を掲げている。その中の一つに「接客本位を家族本位とする」がある。これは江戸以来の住宅の性格を受け継いだもので、接客部分を重視する反面、家族の生活部を軽視していたのに対して、家族の生活部をもっと重視しようとする新しい考え方である。また、住宅各部の虚飾について批判され、多くの書籍で身分差への批判が述べられている。これによって、当時の表玄関と内玄関の並列配置と言う身分差を示す象徴的な位置関係についても批判され、内玄関の存在意義が揺らぐ。また、「住宅改善の方針」の中に「衛生・防火を考慮する」がある。この衛生・防火の考慮により住宅設備は改善され、給湯設備も変化する。この結果、風呂の湯を沸かすために設置されていた焚口はボイラーへと変わり、焚口の利便上近くに配置されていた勝手口は機能の一端を失う。さらに、「住宅改善の方針」の「共同住宅・田園都市の施設を奨励する」により、都市の住宅としてアパートメントが普及する。アパートメントに出入口は1つしかなく、今までの都市独立住宅とは異なった性格の出入口の登場と言える。

よって、大正・昭和戦前の近代住宅の変遷を捉える上で、出入口を研究することは極めて重要であり、その足掛かりとして内玄関を分析することは大変有意であると考えられる。

そこで本論では、内玄関に関する先行研究として佐賀大学の論文^{*2}を参照し研究を行う。ただし、この論文は住宅関連書籍を資料に研究を行っているため時間軸にズレがあると考えられる。そこで本論では時間軸が比較的正確な雑誌の特徴に注目し、内玄関の配置の変化を探っていくこととする。

出典

¹ 内田青蔵『日本の近代住宅』,鹿島出版会,2016年

鈴木成文『住まいを読む-現代日本住居論』,2002年

² 『わが国近代の住宅関連書籍に見られる「内玄関」について』

(中村寛子,後藤隆太郎,丹羽和彦 日本建築学会九州支部研究報告 第46号 2007年3月)

『住宅規模を考慮したわが国近代の内玄関の変遷』

(田中希,瀨上貴由樹,丹羽和彦 日本建築学会九州支部研究報告 第49号 2010年3月)

1-2 既往研究と本論の目的

上述したように内玄関の有名な研究として佐賀大学の論文^{*2}がある。この佐賀大学の論文^{*2}では、住宅関連書籍を資料として扱っている。住宅関連書籍とは明治後期から昭和初期にかけて一般向けに刊行された書籍であり、当時の建築家や研究者の住宅に対する考え方や実際に建築された住宅の様子が掲載されている。この資料から対象とする住宅事例を1994例抽出し、その中から内玄関を有する事例を202例確認している。内玄関の抽出の条件は掲載図案の室名表記としているが、2以上の出入口を有する場合で室名の表記のないものや「出入口」「中ノ口」などの他の記載があるものは2つのうち小さい方を内玄関としている。分析では刊行年ごとの内玄関の割合、刊行年ごとの規模別にみた内玄関の割合、刊行年ごとの玄関と内玄関の位置関係、刊行年ごとの玄関と内玄関の接続関係、玄関及び内玄関とその周りの室との関係を分析している。その結果、「90坪未満の住宅を中心に明治後期には一定の割合でみられた内玄関が大正期に入ると減少しはじめ、昭和期に再び内玄関をもつ住宅が現れること」「玄関と内玄関の位置関係において、特に30坪以上60坪未満の比較的小規模な住宅では玄関と内玄関が隣り合っているもの及び書生室などの取次のための室を挟んでいるものが大正初期ごろから徐々に減少傾向にあるのに対し、玄関と内玄関が離れているものは増加傾向にあること、これには廊下が影響していると考えられること」「大正期には玄関に家族の生活を支える室が接続する図案がみられ始め、昭和期に入ると勝手口の便を図った内玄関が現れるなど当初の内玄関の持つ意味とは違ったものも見られること」「格式に対する思想の変化に加え、住宅における接客空間や住宅そのものの規模の縮小が相まって内玄関は減少していくがその後の玄関と内玄関は格式を保ちながら消えていくものと新たに実用的機能を持つことで残っていくものの2つのタイプがあること」が述べられている。

しかし、この論文で資料として扱っている住宅関連書籍には建築家の作品集やあるテーマのみの特集など時間軸にばらつきのあるものが含まれている。それにもかかわらず、建物の竣工年を書籍の発行年として扱っているため時系列にズレがあると考えられる。

そこで本論では時間軸が比較的正確な雑誌を資料とし、その中でも住宅作品の掲載数が多い雑誌『住宅』を用いて研究を行う。また本研究の意義として、表玄関・内玄関・勝手口の3つの出入口の距離関係を示すことで内玄関の設置傾向を探る。

出典

² 『わが国近代の住宅関連書籍に見られる「内玄関」について』
 (中村寛子,後藤隆太郎,丹羽和彦 日本建築学会九州支部研究報告 第46号 2007年3月)
 『住宅規模を考慮したわが国近代の内玄関の変遷』
 (田中希,瀧上貴由樹,丹羽和彦 日本建築学会九州支部研究報告 第49号 2010年3月)

1-3 雑誌『住宅』について^{*3}

雑誌『住宅』は、改めて詳述する「住宅改良会」という生活改善を目指し、住宅に関する啓蒙活動を行っていた団体が機関誌として発行したものである。また大正5年から昭和18年までの27年間、長期にわたって継続的に発行され続けた住宅専門雑誌であり、このような雑誌は他になく、息の長いものであったと言える。

1-3-1 発行母体「住宅改良会」について^{*3}

住宅改良会の正式な設立時期は大正6年2月10日であり、その設立の準備は大正4年頃から開始されたと考えられる。また、機関誌が大正5年8月1日に刊行されていることから設立以前に具体的事業が開始されていたと言える。

住宅改良会の設立者は「あめりか屋」店主の橋口信助で、その協力者が当時常磐松高等女学校（現トキワ松学園）校長の三角錫子である。橋口は明治44年に西洋住宅の利点に注目し、在来住宅の改良の必要性を主張した。また三角は家事労働の改善の追求の中で在来住宅の改良の必要性を認識していた。この2人の接触により2つの異なった立場から認識されていた改良論の一体化が行われ、住宅改良会設立の契機となったと考えられる。

住宅改良会の設立の目的は、住宅の改良を図ることであり、その主張と共に実践を重視するものであった。規則には、この目的を果たすための事業予定として6つの事業が定められている。

業務予定内容は以下の6つである。

1. 研究会・講演会の開催
2. 改良住宅の図面・写真の紹介
3. 会員に対し住宅建築の技師・職工および建築関係の商店の紹介
4. 住宅・家具等の改良案懸賞募集
5. 会員に対し改良住宅の図面・写真・仕様書の配布
6. 住宅に関する出版物の刊行

1.2.4.6.は一般の人々を対象とするもので住宅改良の啓蒙化を目指したものである。この事業内容の1つとして雑誌『住宅』は発行されたと考えられる。

住宅改良会の構成員は、会主・会員・賛助員・顧問である。顧問は当時の著名な建築関係者が就任しており、賛助員も社会的に地位の高い人々が占めていた。

出典

³ 内田青蔵『雑誌「住宅」復刻版 第1巻』,pp.5-53

『「住宅改良会」の設立について』（内田青蔵 日本建築学会計画系論文報告集 第345号 昭和59年11月）

『「住宅改良会」の沿革と事業内容について』（内田青蔵 日本建築学会計画系論文報告集 第351号 昭和60年5月）

1-3-2 発行時期・号数^{*3}

雑誌『住宅』の第一号の発行時期は大正5（1916）年8月1日である。そして、昭和18（1943）年12月号までほぼ毎月、月刊誌として発行された。その総発行数は、326号を数える。ただ、戦時下の中で休刊とならざるを得なかった昭和18（1943）年12月に至るまでに、2度欠号が出ている。

1-3-3 編集内容・方針^{*3}

雑誌『住宅』の発行目的は、単に住宅改良会の目指した住宅改良に関する趣旨の普及だけではなく、住宅専門の「カタログ」として住宅の写真・写真等を掲載するという目的のもとに計画されていたことが判る。また、この雑誌発行が住宅改良会の事業の中でもきわめて重要視されていたことが窺える。

また、雑誌『住宅』としての性格は2期に分けることができる。

（前期）大正5年8月号～昭和6年4月号

（後期）昭和6年7月号～昭和18年12月号

前期とは橋口信助会主の下、東京に本部が置かれ、西洋住宅を理想として活動が展開された時期であり、雑誌『住宅』の誕生期である。アメリカの家庭雑誌『ハウス・エンド・ガーデン』をモデルとして、住宅を中心に家具・庭園・装飾といった住生活全般の情報を満載した雑誌として刊行され、そのこともあって、編集は主に文学者などが担当した。また、一時期、小説・詩歌・料理などの記事も載せるなど主婦寄りの雑誌の性格を一層強めたこともあったが、あくまでもあめりか屋の手掛けた住宅を掲載しつつ雑誌づくりが展開されていた時期である。しかし、昭和6年5月・6月号は機関誌の売り上げ低下により休刊している。売り上げ低下の原因の1つとして、あめりか屋の宣伝誌という印象が強かったからと考えられる。以上のことを受けて、後期は西村辰次郎会主の下、本部は大阪に移され、西洋住宅を基本にしつつその和風化を目指した活動が展開され、あめりか屋の作品だけではなく他の建築家や工務店などの手掛けた住宅も広く紹介するなどそれまでの雑誌づくりとは明らかに異なり、公器としての性格を前面に展開した時期である。編集方針としては、前期同様一般人を読者対象としていたが、編集は建築教育を受けた建築家が担当し、住宅中心の雑誌といった関係のものも広く紹介される傾向が見られるなど前期とは異なる様相を呈していたといえるのである。

また、このような質的な変化は住宅改良会という組織の機関誌として見た場合、前期は住宅を中心として生活全般にわたって強い主張が見られるのに対し、後期はより公器としての性格を強めることにより機関誌としての性格は弱められていたと考えられる。

出典

³ 内田青蔵『雑誌「住宅」復刻版 第1巻』,pp.5-53

『「住宅改良会」の設立について』（内田青蔵 日本建築学会計画系論文報告集 第345号 昭和59年11月）

『「住宅改良会」の沿革と事業内容について』（内田青蔵 日本建築学会計画系論文報告集 第351号 昭和60年5月）

1-4 研究方法

1-4-1 研究対象

研究対象は建築系雑誌とし、その中でも雑誌『住宅』とする。理由は以下の3点があげられる。

- ・ 他の建築系雑誌よりも圧倒的に多い2000作品ほどの戦前の日本の住宅に関する図面が掲載されていること。
- ・ 大正5(1916)年から昭和18(1943)年までの27年間ほぼ毎月発行されていたこと。
- ・ 専門家のほか一般読者も対象としており、当時の流行や思想を反映していること。

また図1-1に戦前期の主要な建築系雑誌8誌の発行期間と住宅論考数を示している。この図からも雑誌『住宅』の研究資料としての有意性が示せていると考えられる。また雑誌『住宅』を用いた先行研究は多くあり、そのどれを見ても住宅作品の多さについて述べられている。

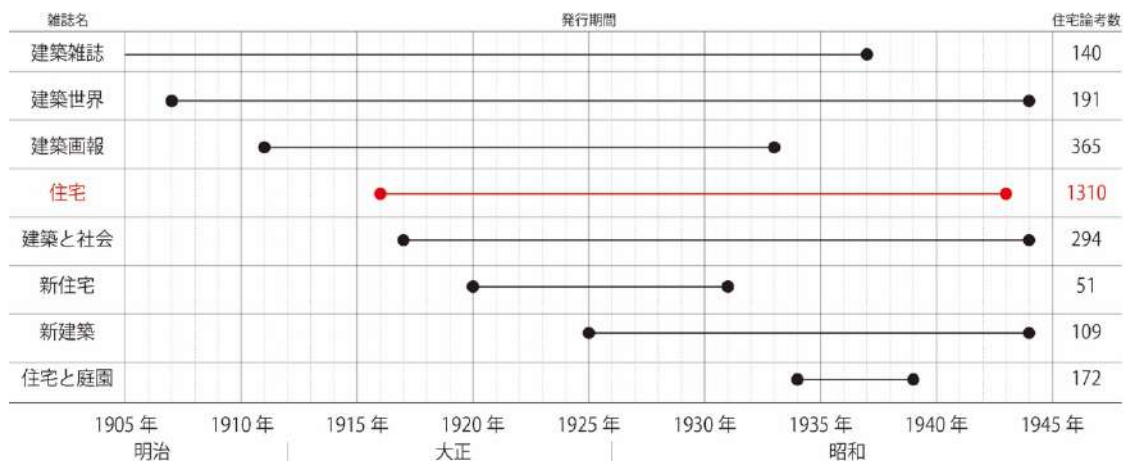


図1-1.建築系雑誌の発行期間と各雑誌にみる住宅関係論考数⁴

出典

⁴ 『明治～昭和戦前期建築系雑誌における住宅関係論掲載数推移に見る「住宅庭園」について』

(藤木竜也,小池僚子 日本建築学会中国支部研究報告集 第36巻 平成25年3月)

対象作品は、日本に建設されたもしくは建設を想定して設計された「都市独立住宅」及び「独立の貸家」（以下カッコ省略）とする。よって、二戸建以上の貸家や社宅、アパートなどの「共同住宅」は1面あるいはそれ以上の面が他の住戸と隣接し、出入口が制限されてしまうため対象作品から除外する。さらに「兼用住宅」についても出入口の性質が都市独立住宅と異なるため除外する。「サンマーハウス」や「山荘」など週末や長期休暇の時だけ使用するものも都市独立住宅と性質が異なるため対象作品から除外する。ただし、「別邸」のように都市の中にある独立住宅については対象作品とする。これらの住宅タイプについては作品名で判断するが図面を見ていく中で当初判断した住宅タイプに疑問が生じた場合は記事を読み修正した。

よって対象作品は日本国内に建設された都市独立住宅や独立の貸家、日本国内で行われた住宅展覧会または日本国内に建設を想定した懸賞案や記事とする。

1-4-2 分析方法

雑誌『住宅』から対象作品の平面図、立面図、断面図、写真や図を抽出し、それらをナンバリングする。ナンバリング方法は以下に示す。

雑誌名-刊行年-刊行月-順番-作品面-設計者-図面名*

*図面名は以下の通りである。

- ・P…平面図
- ・E…立面図
- ・S…断面図
- ・D…詳細図
- ・G…写真や図

ナンバリングしたこれらの資料を元にデータシートを作成する。実際に作成したデータシートの一例を図1-2に示す。

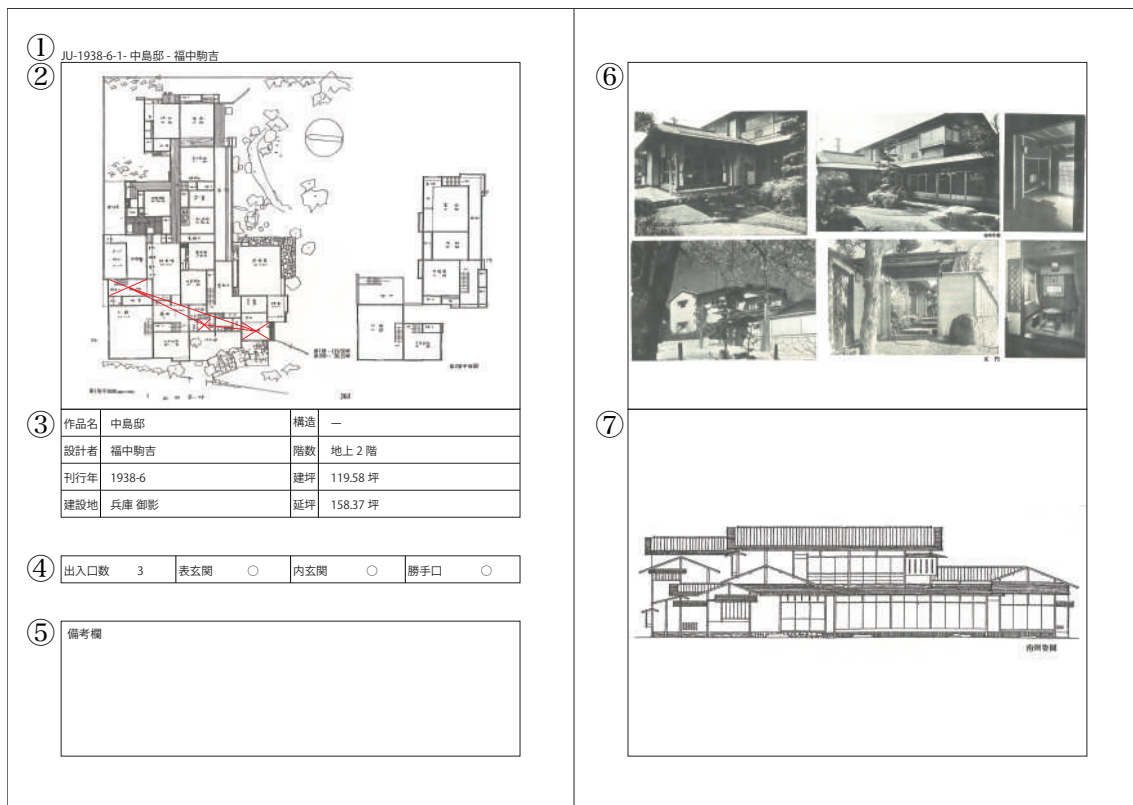


図 1-2. データシートの記入例

表注

- ① 雑誌名-刊行年-刊行月-順番-作品面-設計者
- ② 平面図
- ③ 作品名、設計者、刊行年、建設地、構造、階数、建坪、延坪
- ④ 出入口数、表玄関、内玄関、勝手口の有無（名称があるものは丸印をつけ、無いものは自ら判断せず、空白とする。）
- ⑤ 備考欄
- ⑥ 写真や図
- ⑦ 立面図、断面図

本研究において④は特に重要で、まずは図名中の表記に従ってその有無を判断する。次に、出入口が3つあり、その内2つの出入口の名称について表記がある場合は出入口の名称により判断する。したがって、出入口が3つあり名称の表記が1つだけあるもの、出入口が2つあり名称の表記が1つだけあるものは他の出入口の種類を不明として扱った。

また3つの出入口の距離関係を探るにあたっては、それぞれの出入口の四隅を対角線で結んでその中心を確認し、各出入口の中心点相互を結んで三角形を描き、各辺の長さの比を算出して分析を行う（図 1-2,②の赤線）。

第2章 分析

2-1 平面方向の分析（数量・配置について）

2-1-1 対象作品数と内玄関を保有する作品数の割合

2-1-2 住宅規模別にみる内玄関を保有する作品数の割合

2-1-3 内玄関の配置について

2-1-4 表玄関・内玄関・勝手口の距離関係について

2-2 立面方向の分析（外観構成について）

2-2-1 外観について

2-2-2 建具について

第2章 分析

2-1 平面方向の分析（数量・配置について）

2-1-1 対象作品数と内玄関を保有する作品数の割合

雑誌「住宅」から都市独立住宅 1769 例、独立の貸家 25 例の合計 1794 例を抜き出した。その中で平面図がないものや平面図の線が潰れていて読み取れないものを除外し、1780 例を抜き出した。以後はこの 1780 例を「対象作品数」（以下カッコは省略）と呼ぶ。対象作品数の中で内玄関を保有する作品は 263 例確認できた。これら対象作品数と内玄関の内訳を表 2-1、グラフを図 2-1 に示す。

表 2-1.雑誌「住宅」の内訳

刊行年	全作品数	対象作品数	内玄関数	内玄関の割合
1916	10	9	0	0%
1917	37	35	9	26%
1918	16	16	1	6%
1919	18	17	5	29%
1920	34	31	5	16%
1921	34	34	7	21%
1922	120	120	3	3%
1923	30	30	1	3%
1924	38	38	4	11%
1925	48	48	5	10%
1926	49	48	5	10%
1927	25	24	5	21%
1928	22	22	3	14%
1929	62	62	2	3%
1930	38	38	1	3%
1931	58	58	12	21%
1932	81	79	14	18%
1933	111	111	10	9%
1934	108	108	18	17%
1935	154	153	18	12%
1936	110	110	24	22%
1937	105	105	30	30%
1938	90	90	24	27%
1939	96	96	29	31%
1940	88	88	17	19%
1941	110	110	8	7%
1942	92	92	2	2%
1943	10	10	1	10%
合計	1794	1782	263	

表注

- ・全作品数は雑誌「住宅」から抜き出した都市独立住宅と独立の貸家の数を表している。
- ・対象作品数は全作品数から平面図のないもの、平面図の線が潰れていて読み取れないものを除外した数を表している。
- ・内玄関数は対象作品数の中で内玄関を保有する作品数を表している。
- ・内玄関の割合は対象作品数に対する内玄関を保有する作品数の百分率を表している。

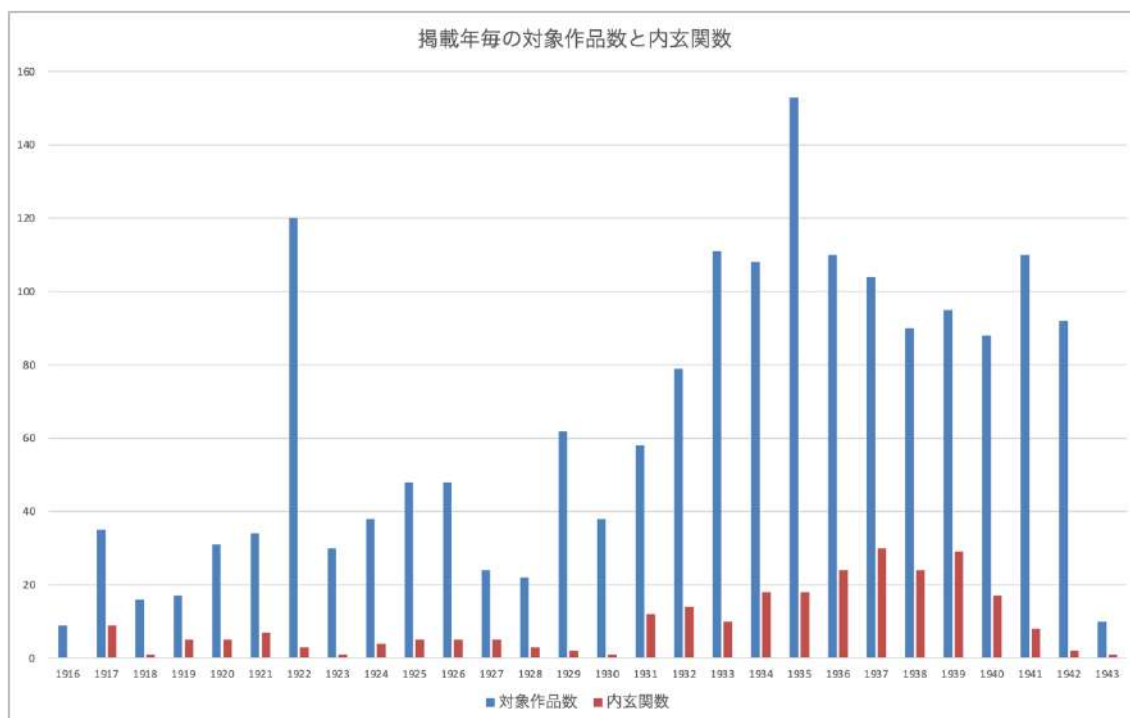


図 2-1.掲載年毎の対象作品数と内玄関を保有する作品数

図 2-1 は、対象作品数と対象作品数の中から内玄関を保有する作品数を掲載年毎に表したグラフである。

これを見ると、青色の対象作品数は 1930 年頃から増加し、1935 年の 153 例をピークに徐々に減少することが分かる。この変化に呼応するように赤色の内玄関を保有する作品数も 1930 年頃から増加し、1937 年の 30 例をピークに減少する。

ただし、対象作品数と内玄関を保有する作品数は掲載年毎にバラつきがあるため、次節以降は割合で見えていくことにする。

そこで、次に内玄関を保有する作品数の割合を掲載年毎に図 2-2 に示す。

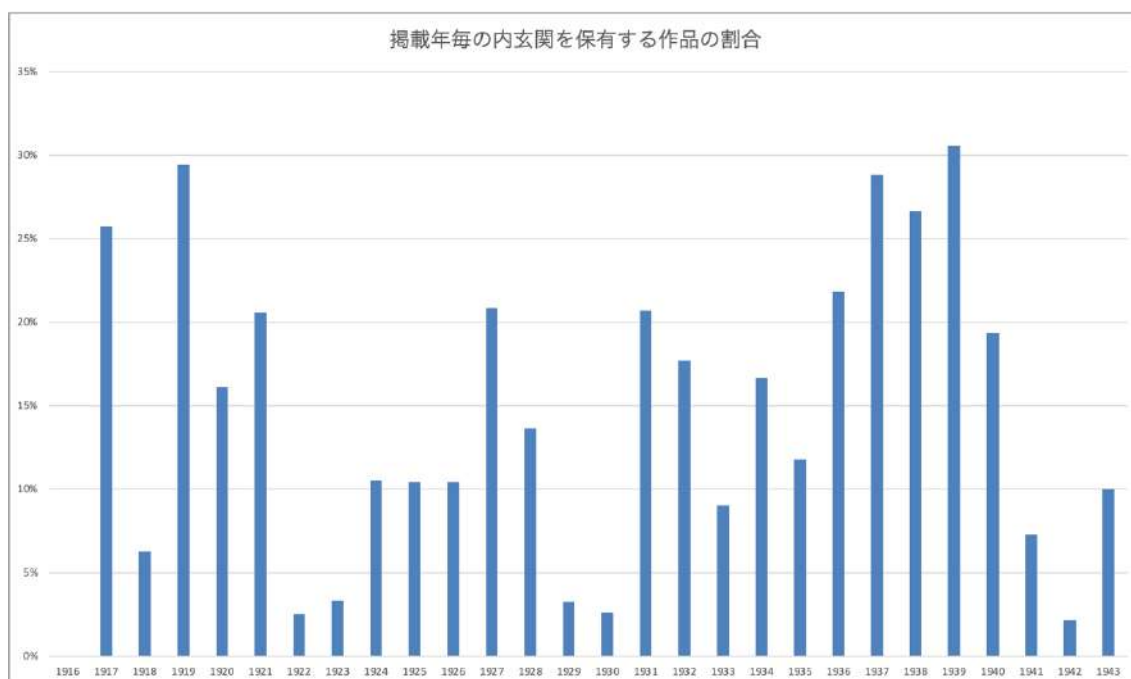


図 2-2.掲載年毎の内玄関を保有する作品数の割合

図 2-2 は、内玄関を保有する作品数の割合を掲載年毎に表したグラフである。

全体の傾向としては、例外も多いが 1916 年から 1930 年頃にかけて減少し、1930 年から 1940 年頃にかけて増加する傾向が見られる。より詳しく見ると、1917 年から 1921 年にかけては内玄関を保有する作品数は 15%～30%の割合で確認でき、1921 年以降は 11% 以下まで減少する。1930 年には 3%まで減少するが、それ以降は徐々に増加し、1939 年にピークの 31%を迎える。その後は再び減少する。

次に、この増加・減少がどのくらいの住宅規模で起こっているのかを把握するために、住宅規模別に内玄関を保有する作品数の割合を見ていくことにする。

2-1-2 住宅規模別にみる内玄関を保有する作品数の割合

住宅規模は延坪を算出して分析する。延坪は、基本的に雑誌に掲載されている場合にはその値を用いているが、延坪の掲載がない作品は、平面図に表現されている寸法や畳2帖を1坪として計算した。それでも計算できない作品は対象から除外した。これを30坪毎にまとめてみると、1.00坪～30.00坪は628例、30.01坪～60.00坪は668例、60.01坪～90.00坪は227例、90.01坪～120.00坪は89例、120.01坪以上は52例確認することができ、合計で1664例になる。ここに除外した作品数116例を合わせると合計で対象作品数の1780例になる。

これら内玄関を保有する作品数の割合を住宅規模別に図2-3に示す。

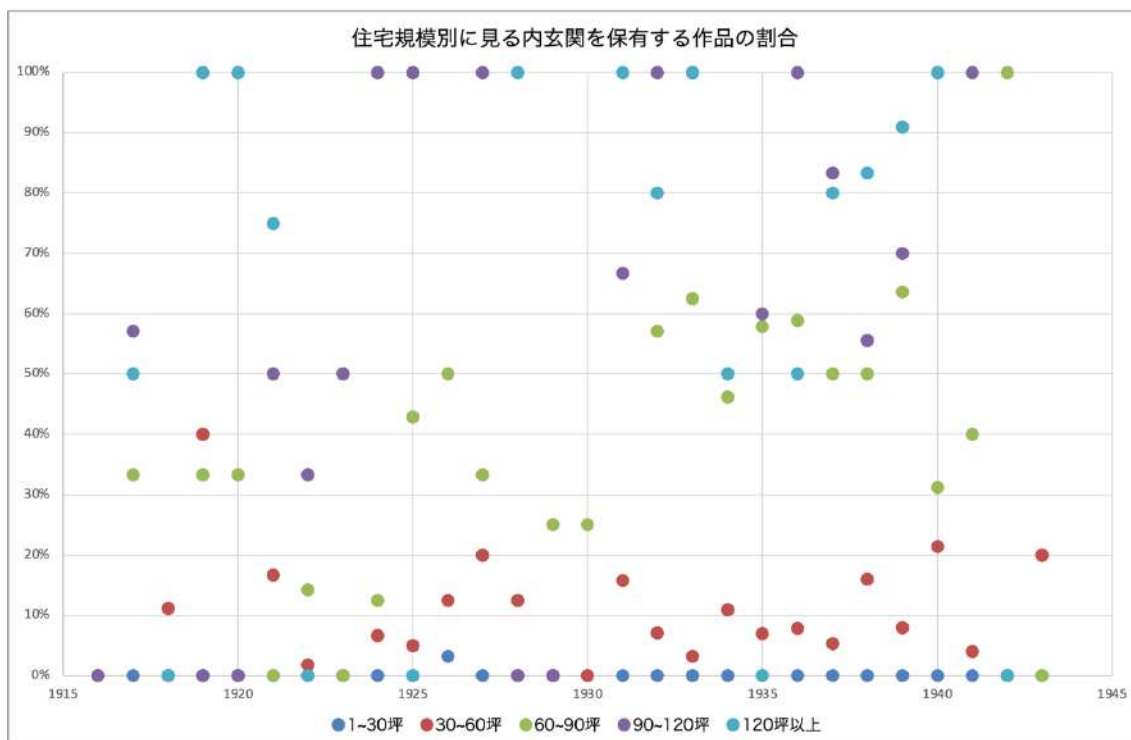


図 2-3.住宅規模別に見る内玄関を保有する作品数の割合

図 2-3 は内玄関を保有する作品数の割合を住宅の規模別に分けて、それを掲載年毎に表したグラフである。なお、注意点として 1930 年以前と 1941 年以降の内玄関を保有する作品数は一桁であり、極端に事例数が少ない年があることに注意されたい。

1931 年から 1940 年の比較的作品数が多い年において、内玄関を保有する作品数の割合を規模別で見ると大きく 3 つの塊が見られる。1 つ目は水色と紫色の点で示した 90.00 坪以上の塊、2 つ目は緑色で示した 60.01 坪～90.00 坪の塊、3 つ目は赤色と青色の点で示した 60.00 坪以下の塊である。90.00 坪以上（水色と紫色の点）では 60%以上の割合で内玄関を保有しており、60.01 坪～90.00 坪（緑色の点）になると 30～60%の割合、60.00 坪以下（赤色と青色の点）になると 25%以下の割合で内玄関を保有することがわかる。

また緑色の点に注目すると 1930 年以前は内玄関を保有する作品数の割合が 50%以下であったのに対して、1930 年以降は内玄関を保有する作品数の割合が 60%前後になっている。紫色の点も同様に 1930 年を境に内玄関を保有する作品数の割合が増加している。

つまり、図 2-2 で見た 1930 年頃から始まる内玄関を保有する作品数の割合の増加は、主に 60-120 坪クラスの住宅が要因と言える。また、住宅規模は内玄関の有無に関わる大きな要因といえ、住宅規模が大きくなるにつれて内玄関を保有する割合が多くなり、反対に住宅規模が小さくなれば内玄関を保有する割合が少なくなることがわかる。ただし例外もあり、住宅規模が小さくても勝手口の代わりに内玄関を設置する場合がみられる（図 2-4）。

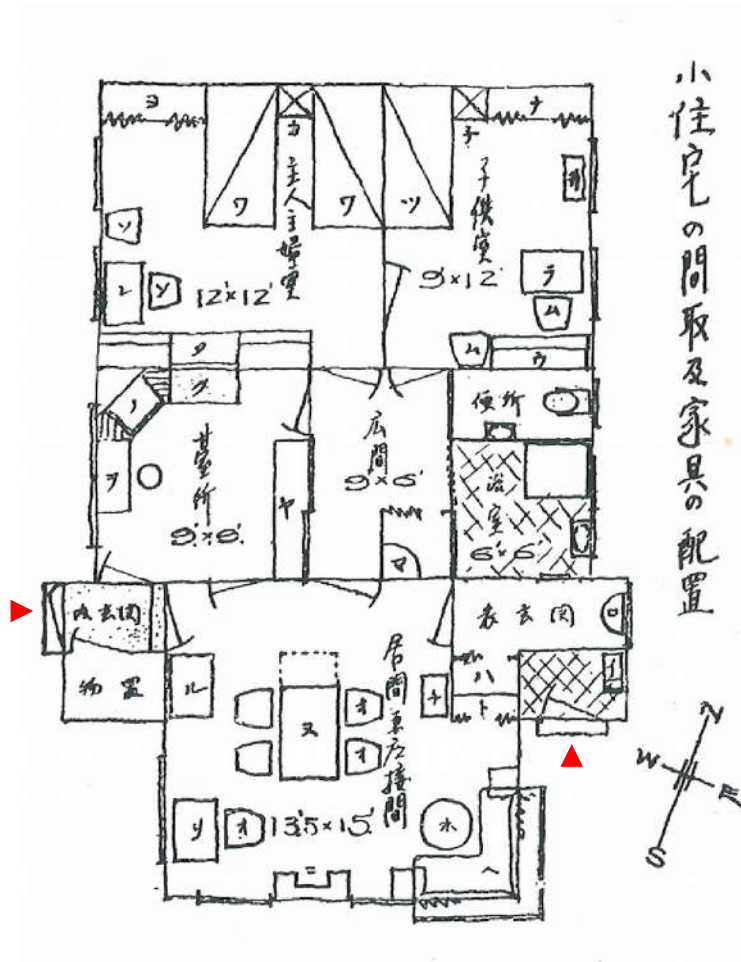


図 2-4.住宅規模が最小の例 (JU-1926-1-3-小住宅設計募集1 延坪 19.38 坪)

図 2-4 は 1926 年 1 月に刊行された小住宅設計募集に掲載されている図面である。延坪は 19.38 坪で内玄関を保有する作品の中で最小規模の住宅である。台所に勝手口はなく、代わりに内玄関が配置されている。

次に内玄関の保有率の増加における住宅内部の室の変化を見るために、内玄関の配置を見ていく。

2-1-3 内玄関の配置について

内玄関の配置を分析するにあたり、内玄関から歩行距離がもっとも短い室を内玄関の「近接室」（以下カッコ省略）とし、内玄関を保有する作品 263 例を対象に近接室を分析する。また使用人室が近接室である場合は、使用人室を除外した場合の近接室を分析する。内玄関の配置の内訳を表 2-2、近接室の割合のグラフを図 2-5 に示す。

表 2-2.内玄関の配置の内訳

刊行年	作品数	対象作品数	全体の内玄関を保有する作品数	出入口数2で内玄関を保有する作品数	出入口数3以上で内玄関を保有する作品数	接客室	家族室	私室	水廻り	その他
1916	10	9	0	0	0	0	0	0	0	0
1917	37	35	9	3	6	3	2	1	2	1
1918	16	16	1	1	0	0	0	0	1	0
1919	18	17	5	3	2	0	1	0	4	0
1920	34	31	5	1	4	1	1	0	2	1
1921	34	34	7	0	7	1	3	1	1	1
1922	120	120	3	0	3	0	1	0	2	0
1923	30	30	1	0	1	0	1	0	0	0
1924	38	38	4	0	4	0	1	1	2	0
1925	48	48	5	0	5	1	0	1	2	1
1926	49	48	5	1	4	0	5	0	0	0
1927	25	24	5	1	4	0	3	0	1	1
1928	22	22	3	1	2	0	2	0	0	1
1929	62	62	2	0	2	0	0	0	1	1
1930	36	38	1	0	1	0	1	0	0	0
1931	58	58	12	0	12	4	3	0	5	0
1932	81	79	14	0	14	3	6	1	4	0
1933	111	111	10	1	9	3	2	1	4	0
1934	108	108	18	0	18	1	4	5	8	0
1935	194	153	18	3	15	3	7	1	7	0
1936	110	110	24	3	21	9	5	3	5	2
1937	104	104	30	5	25	9	9	1	9	2
1938	90	90	24	3	21	5	8	1	10	0
1939	95	95	29	4	25	6	9	5	8	1
1940	88	88	17	1	16	5	4	2	5	1
1941	110	110	8	1	7	2	4	1	1	0
1942	92	92	2	0	2	1	0	0	1	0
1943	10	10	1	0	1	1	0	0	0	0
合計	1794	1780	263	32	231	58	82	25	85	13

表注

- ・使用人室（女中室、書生室、召使室、男部屋）は除いて近接室を分析している。
- ・家族室…茶の間、居間、食堂
- ・私室 …主人・婦人室、子供室、老人室、書斎、勉強室、裁縫室、ピアノ室
- ・水廻り…浴室、台所、脱衣・更衣・化粧室
- ・接客室…応接室、次の間、客間・客室
- ・その他…名称がない部屋、名称が読み取れない部屋

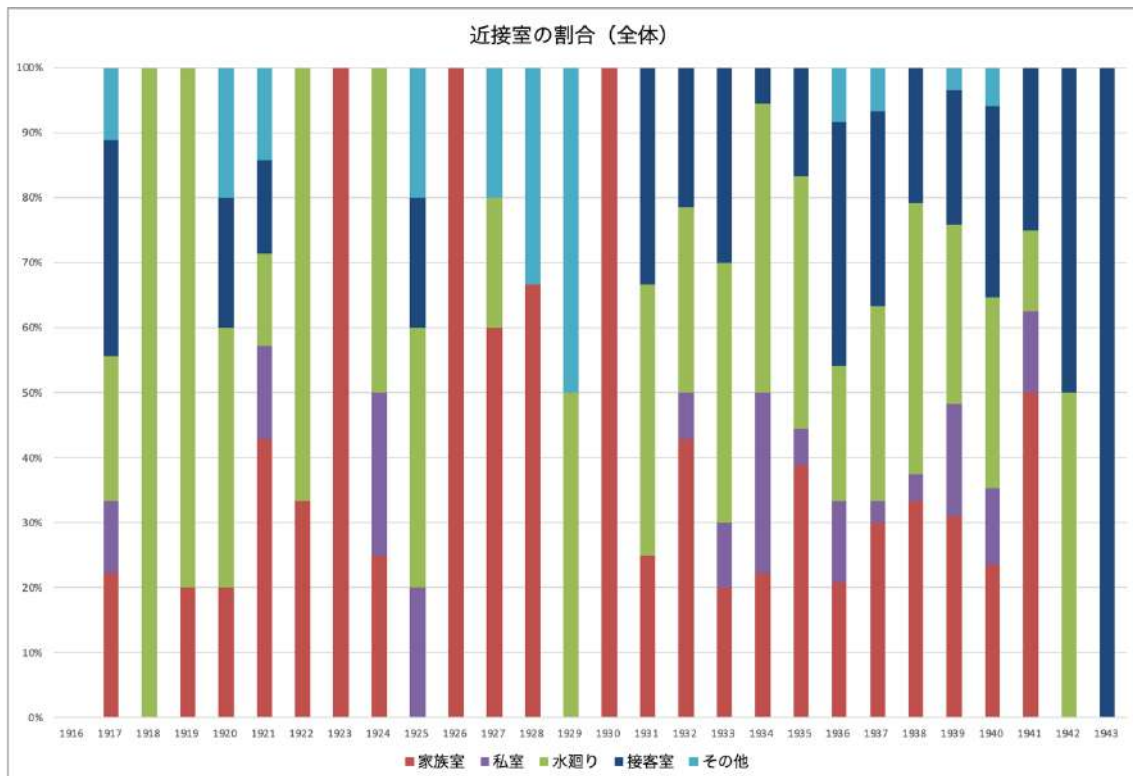


図 2-5.近接室の割合

図 2-5 は近接室の割合を掲載年毎に表したグラフである。赤色が家族室（茶の間、居間、食堂）、紫色が私室（主人・婦人室、子供室、老人室、書斎、勉強室、裁縫室、ピアノ室）、緑色が水廻り（浴室、台所、脱衣・更衣・化粧室）、青色が接客室（応接室、次の間、客間・客室）、水色がその他（名称がない部屋、名称が読み取れない部屋）である。

全体で見た近接室は、赤色、紫色、緑色で示した主に家族が使う室が多い。また、1930年以前は近接室に紺色の接客室が配置されることはわずかであったが、1931年以降になると接客室が近接室になる割合が明らかに増加していることが分かる（図 2-6,2-7）。

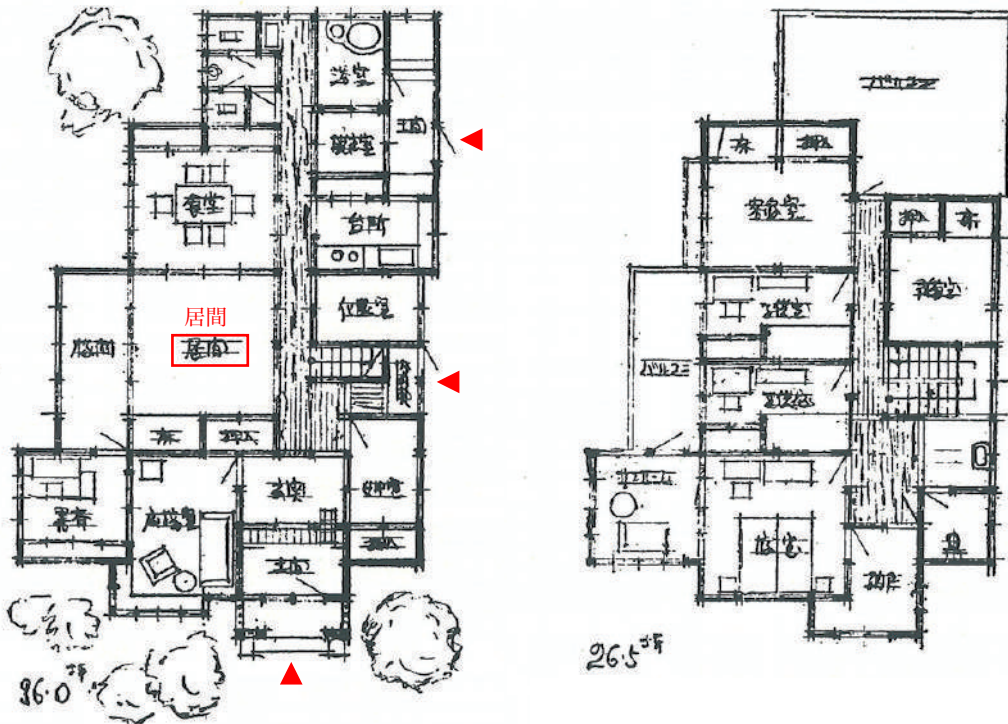


図2-6.内玄関と家族室が近接している例 (JU-1926-11-2-中流住宅の一案-山本拙郎 延坪 62.50坪)

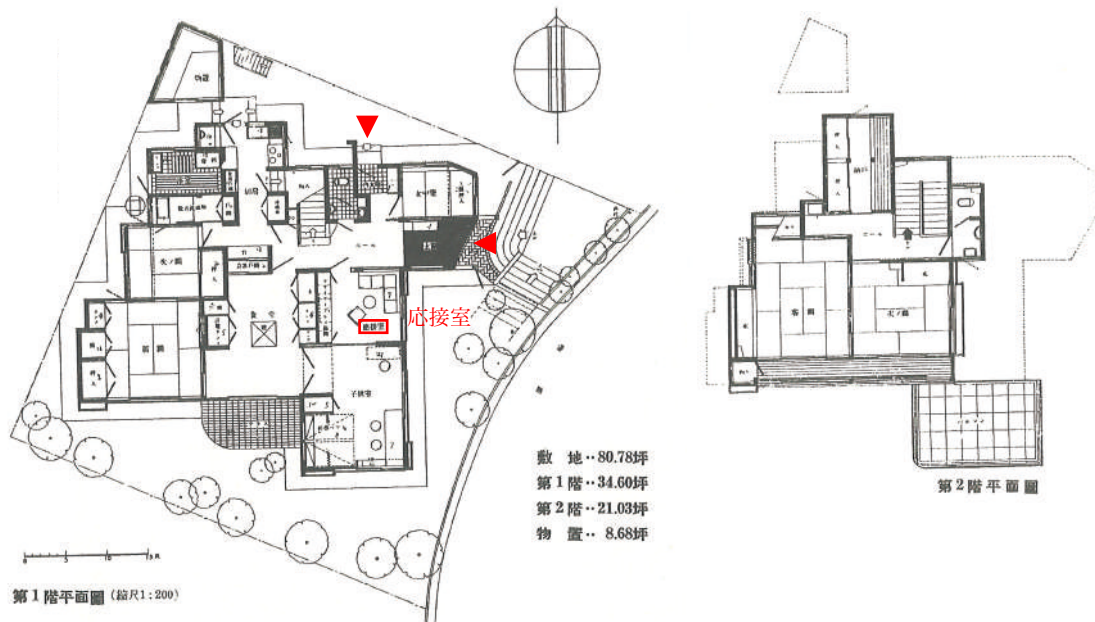


図2-7.内玄関と接客室が近接している例 (JU-1940-5-2-H邸-山脇巖 延坪 55.63坪)

次に出入口が表玄関・内玄関・勝手口の3つの場合と表玄関・内玄関の2つの場合では内玄関の役割に違いがあると考えられるため分けて分析を行う。

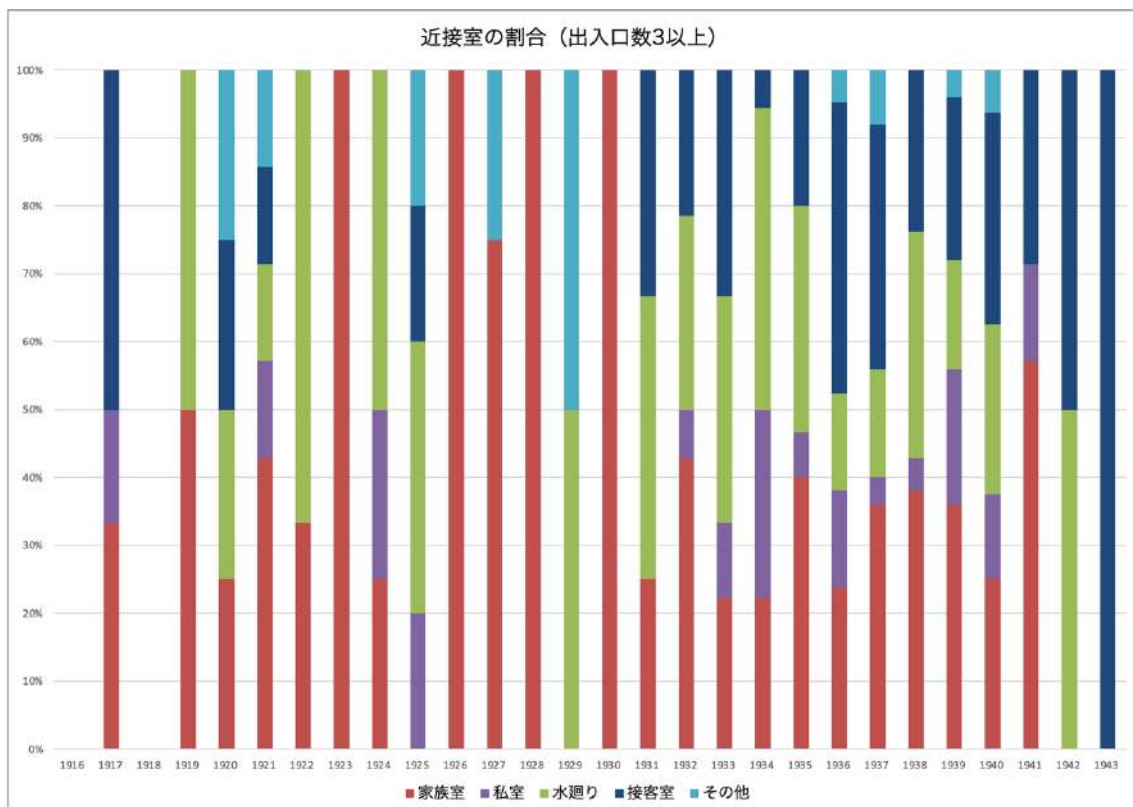


図 2-8. 出入口が表玄関・内玄関・勝手口の 3 つの場合の近接室の割合

図 2-8 は出入口が表玄関・内玄関・勝手口の 3 つの場合で近接室の割合を掲載年毎に表したグラフである。作品数は 231 例存在する。

近接室は図 2-5 とほぼ同様の変化で主に家族が使う室が多く、1930 年以前と 1931 年以降を境に紺色の接客室が増加していることが分かる。主に家族が使う室が近接室の例として、1939 年 7 月に刊行された、納富重雄設計の住宅をあげる (図 2-9)。

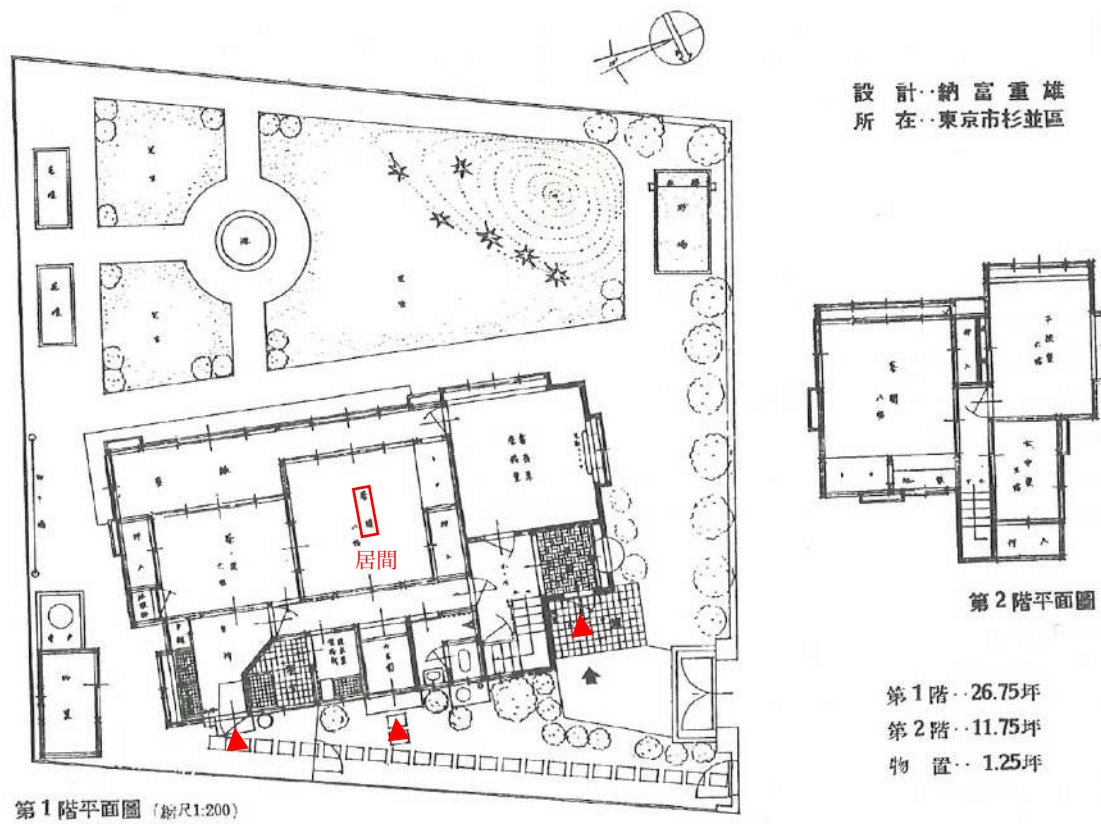


図 2-9.出入口が表玄関・内玄関・勝手口の3つの場合の近接室の例

(JU-1939-7-6-納富重雄 延坪 74.40坪)

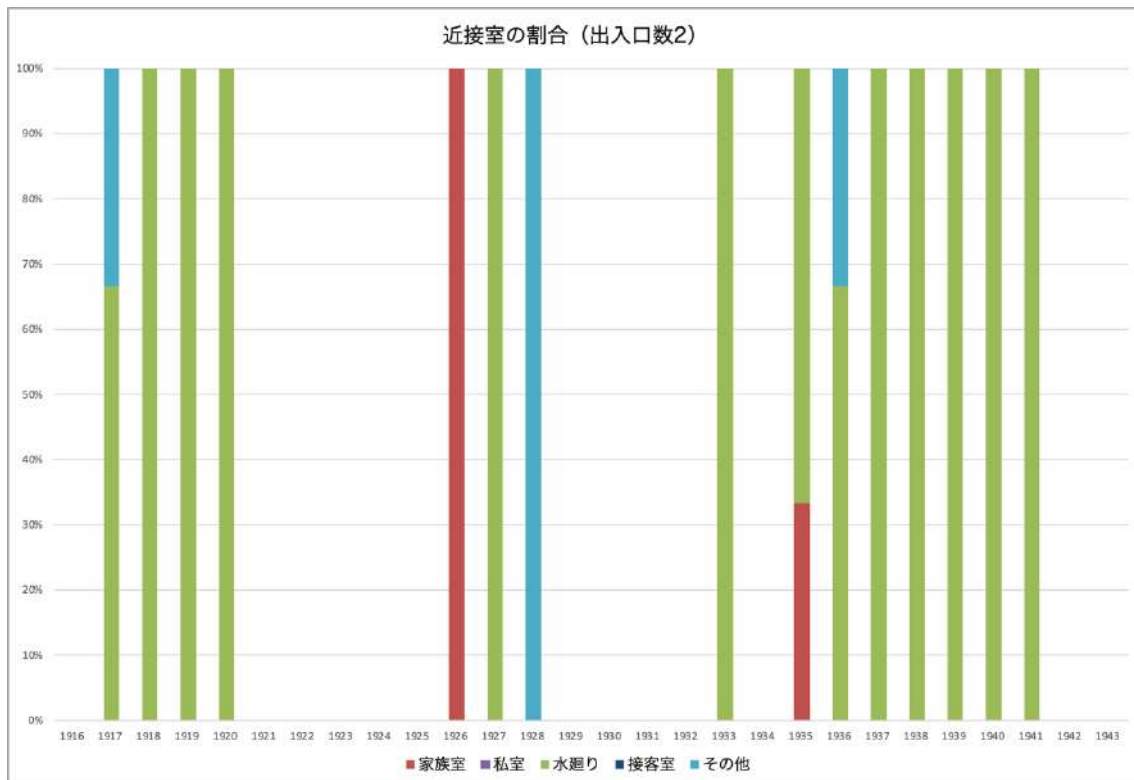


図2-10.出入口が表玄関・内玄関の2つの場合の近接室の割合

図2-10は出入口が表玄関・内玄関の2つの場合の近接室の割合を掲載年毎に表したグラフである。作品数は31例存在する。

近接室は緑色の水廻りがもっとも多いことがわかる。水廻りが近接室の例として、1939年8月に刊行された、あめりか屋が設計した中山邸をあげる(図2-11)。

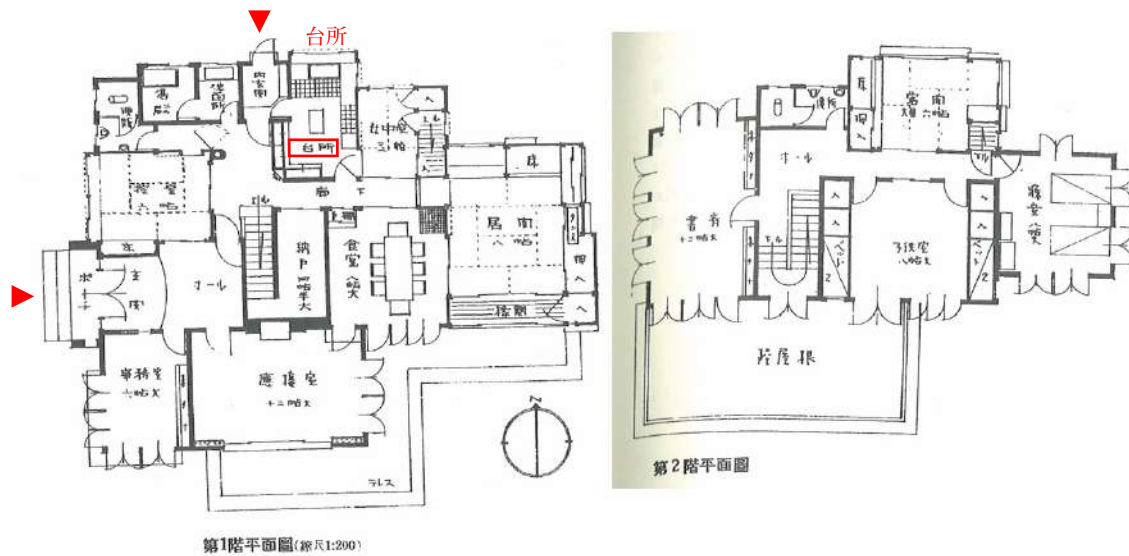


図 2-11. 出入口が表玄関・内玄関の 2 つの場合の近接室の例

(JU-1939-8-4 中山邸-あめりか屋 延坪 68.73 坪)

中山邸は西側に表玄関と応接室、北側に水廻り、東側に居間と食堂、中心に階段が配置された住宅である。北側に置かれた内玄関は、台所と浴室・洗面所に挟まれており、勝手口の役割を持った内玄関と考えられる。

以上の結果より、内玄関の配置は、出入口数に応じて 2 つのタイプに分けられる。1 つ目は、主に家族が使用する室に近接して配置される内玄関である。このタイプの内玄関は、表玄関・内玄関・勝手口の出入口が 3 つ存在する場合に多く見られ、家族が出入するために使われる従来の機能を維持している内玄関と考えられる。2 つ目は、水廻りに近接して配置される内玄関である。このタイプの内玄関は、出入口が表玄関・内玄関のみの場合に多く見られ、勝手口の役割を持った内玄関と考えられる。また少数ではあるが出入口が表玄関・内玄関・勝手口の 3 つの場合で 1931 年以降に接客室に近接した内玄関も見られる。

次に、表玄関・内玄関・勝手口の距離関係について見ていく。

2-1-4 表玄関・内玄関・勝手口の距離関係について

2-1-4-1 分析方法

距離関係の分析は、表玄関・内玄関・勝手口の3つの出入口を直線で結び、相互の距離を計測して比率を求めることとした。その手順を以下に示す。

1. 表玄関・内玄関・勝手口のそれぞれの土間(靴の履き替え場所)の四隅を対角線で結ぶ。
2. 対角線によってできたそれぞれの交点を相互に直線で結ぶ。
3. 3辺の長さを測り、比率を算出する。

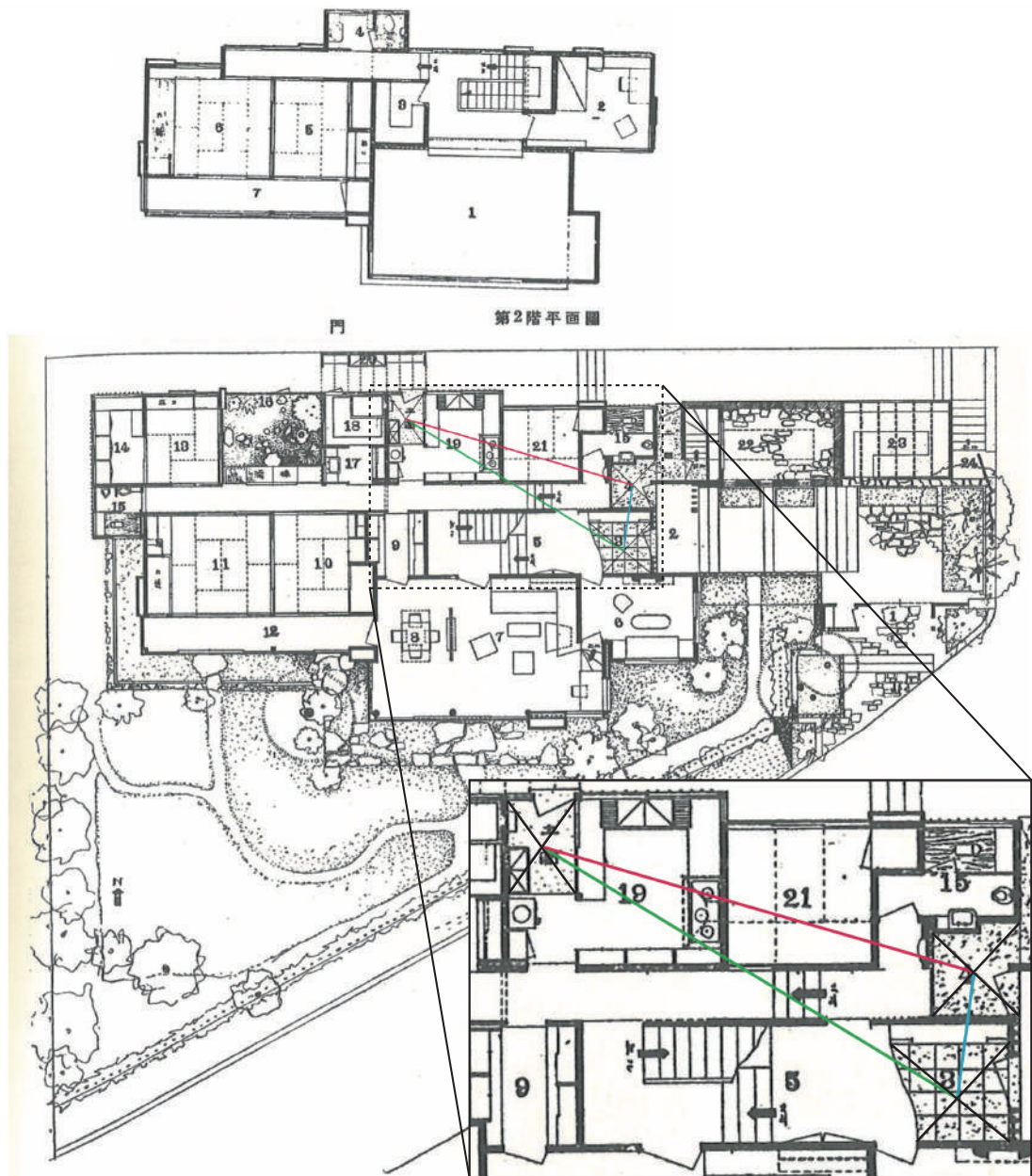


図 2-12.線の引き方の例 (JU-1941-2-1-熊谷邸-石川恒雄)

2-1-4-2 分析

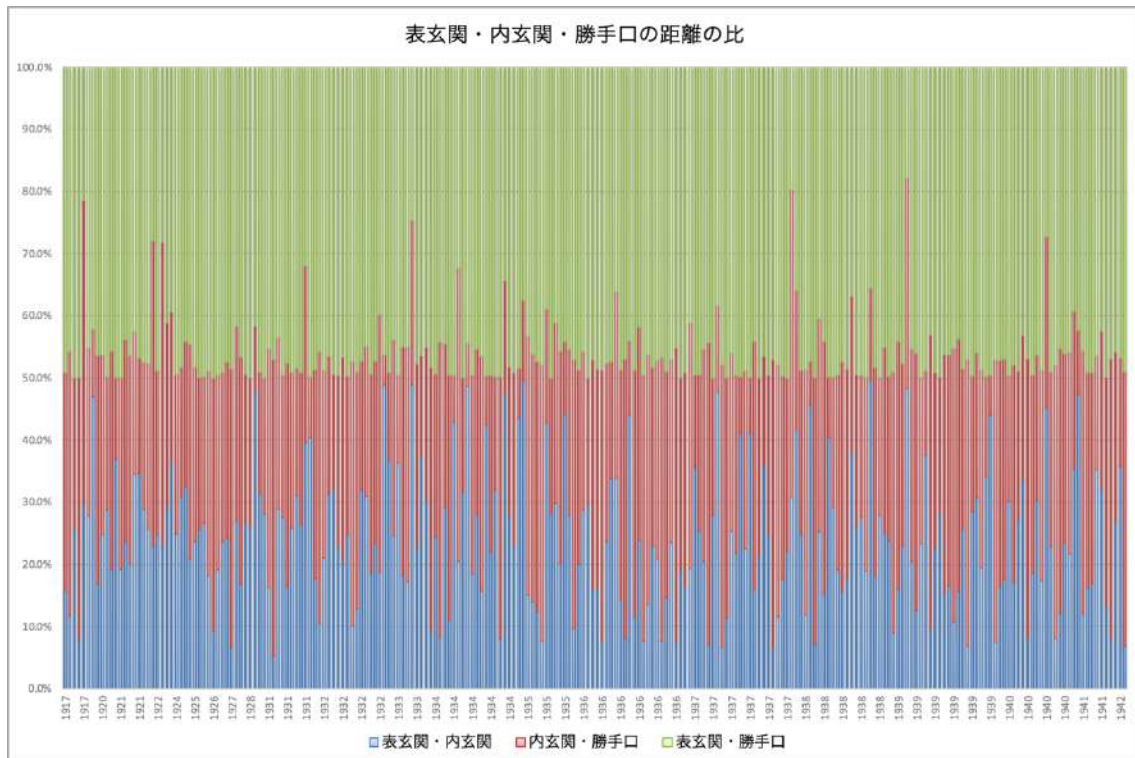


図 2-13.表玄関・内玄関・勝手口の距離の比

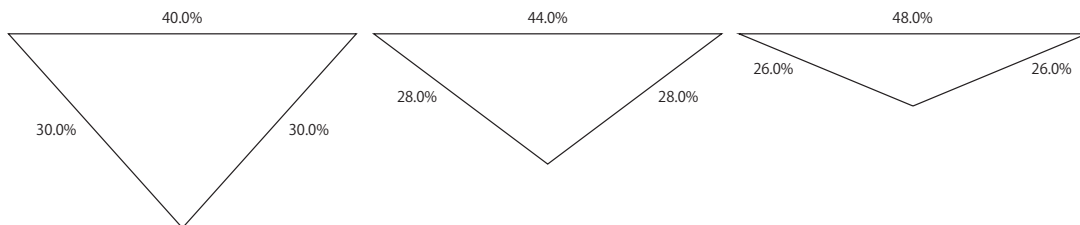


図 2-14.三角形の比率の参考図

図 2-13 は表玄関・内玄関・勝手口がある作品を 2-4-1 の分析方法で述べた手順で線を引き、比率を出したグラフである。すべての作品を掲載年毎に示しており、青色が表玄関・内玄関、赤色が内玄関・勝手口、緑色が表玄関・勝手口の比を表している。緑色の表玄関・勝手口の比はほとんど 50%に近い値で一定のため、内玄関は表玄関と勝手口を結んだ間で移動していることがわかる。よって内玄関の移動傾向を見るために、以下に表玄関・内玄関、内玄関・勝手口のみグラフを示す (図 2-15)。

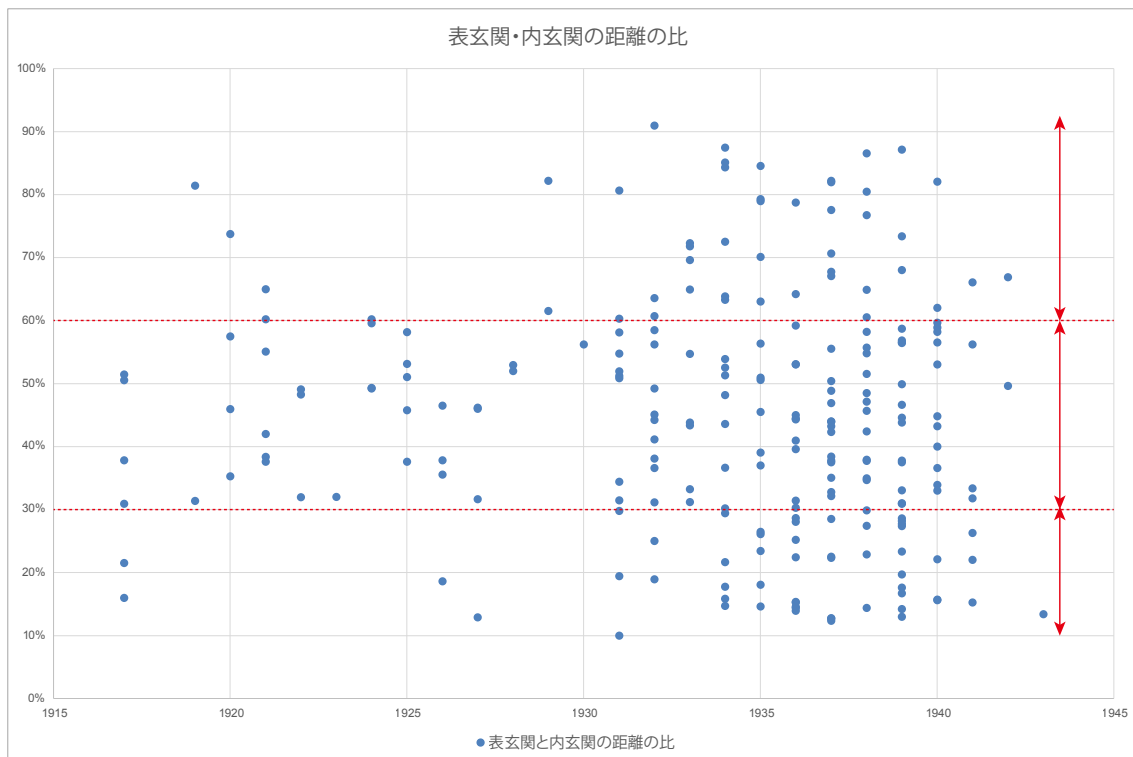
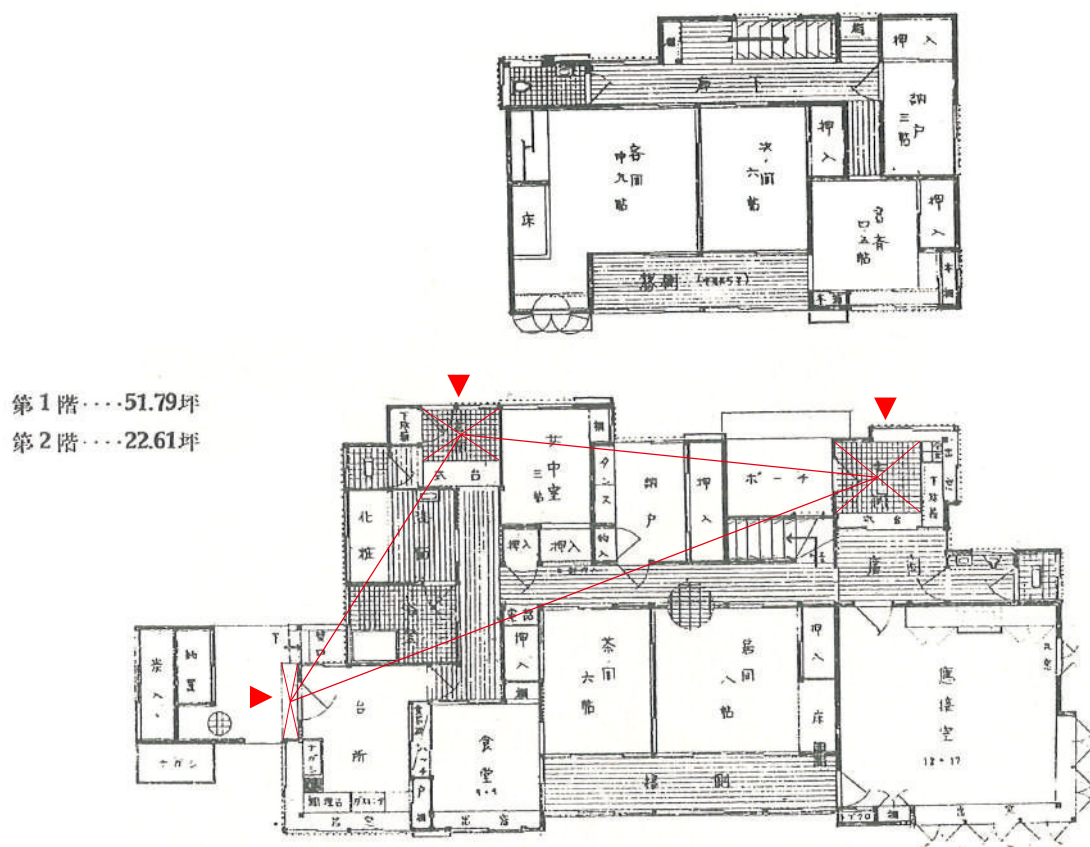


図 2-16.表玄関・内玄関の距離の比

図 2-16 は図 2-15 の表玄関・内玄関の距離の比だけを取り出し、分布図に表したグラフである。

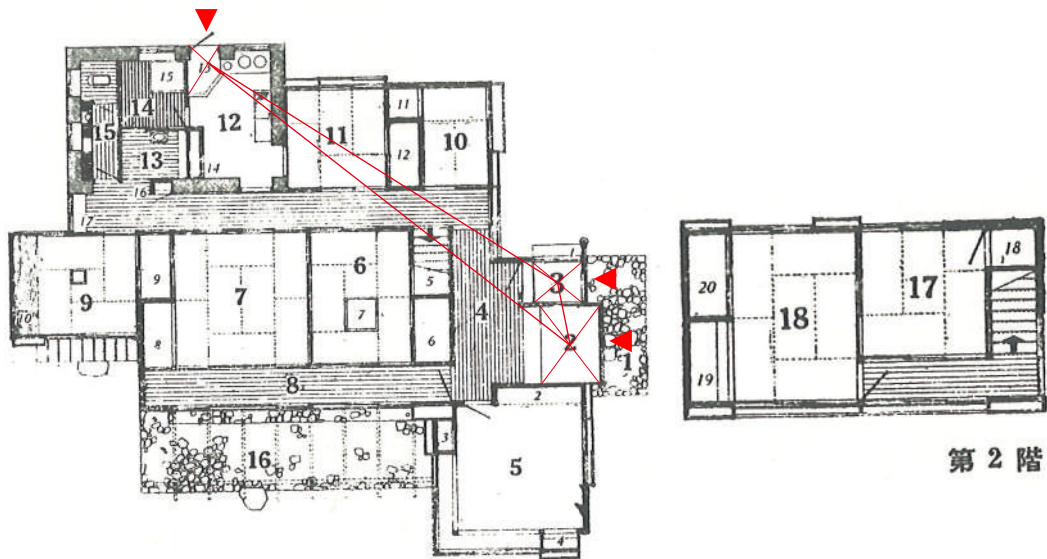
1930 年以前は表玄関・内玄関の距離の比がおおむね 30%~60%に収まっていたが、1931 年以降ではこれに加えて、30%以下や 60%以上になる作品も多数見られようになる。つまり、1930 年以前は内玄関が表玄関と勝手口の間付近にあるが (図 2-17)、1931 年以降では 1930 年以前のタイプに加えて、表玄関・内玄関の距離の比が 30%以下の表玄関と内玄関が近いタイプ (図 2-18)、表玄関・内玄関の距離の比が 60%以上の表玄関と内玄関が遠いタイプ (図 2-19) に分かれ、配置は多様化していくことが分かる。さらに、出入口が表玄関と内玄関のみのタイプ (図 2-20) を加えると、全体としては 4 つのタイプに分けることができる。



第1階・第2階 平面圖 (縮尺 1:200)

図 2-17.内玄関が表玄関と勝手口の中間にある例 (JU-1939-8-3-K 邸-白鳳社建築工務所 延坪 74.40坪)

図 2-17 は内玄関が表玄関と勝手口の中間にあるタイプの例である。これは、1939 年 8 月に掲載された K 邸で設計は白鳳社建築工務所である。この作品は右側に表玄関と応接室、左側に水廻りと食堂、女中室を配置し、それを中廊下と居間で接続している住宅である。内玄関は表玄関と勝手口のほとんど中間の位置にあり、家族のための機能が強い内玄関と考えられる。



第1階平面圖 (縮尺 1:200)

平面圖説明

1..ポーチ、2..玄関、3..内玄関、4..廣間、5..應接室、6..6帖、7..8帖、8..廣縁、9..4帖半、10..女中室、11..茶の間、12..臺所、13..洗面所、14..浴室、15..便所、16..テレス、17..4帖半、18..6帖

1..履物入、2..ピアフ、3..物入、4..飾棚、5・6..押入、7..腰掛爐、8..床の間、9..押入、10..踏込床、11・12..押入、13..土間、14..戸棚、15..浴槽、16..掃除道具入、17..戸棚、18..押入、19..床の間、20..押入

図2-18.表玄関と内玄関が近い例 (JU-1943-7-1-藤井邸-廣瀬初夫 延坪 45.37坪)

図2-18は表玄関と内玄関が近いタイプの例である。これは、1943年7月に掲載された藤井邸で設計は廣瀬初夫である。この作品は右側に表玄関と応接室、上側に水廻りと茶の間、女中室を配置し、それを中廊下で接続、中央に居間を置いている住宅である。内玄関は表玄関に隣接しており、従来の機能を維持した内玄関と考えられる。

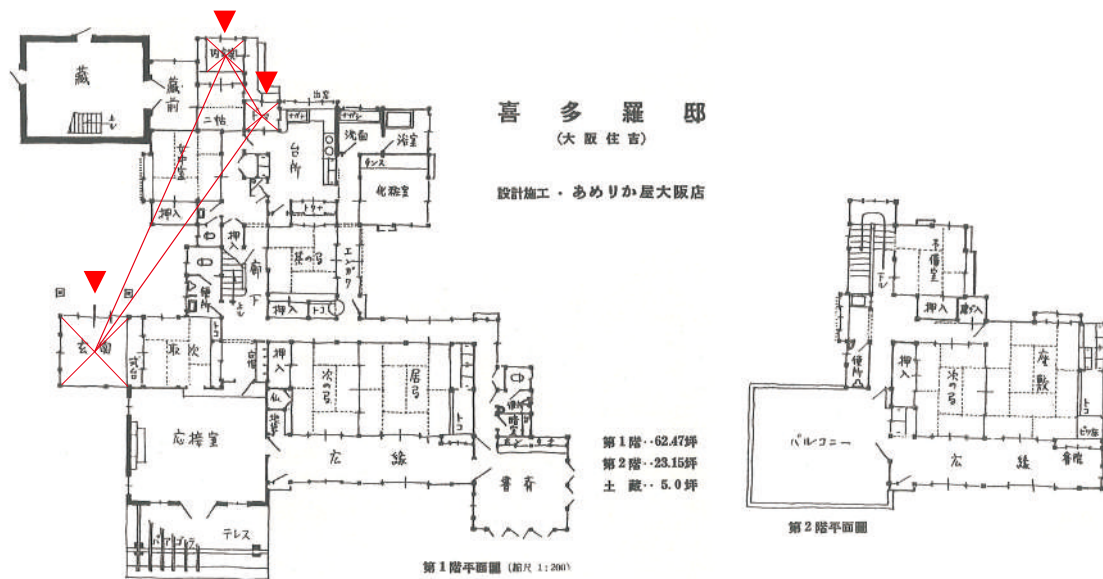


図 2-19.表玄関と内玄関が遠い例 (JU-1940-12-4-喜多羅邸-あめりか屋 延坪 85.62坪)

図 2-19 は表玄関と内玄関が遠いタイプの例である。これは、1940 年 12 月に掲載された喜多羅邸で設計はあめりか屋である。この作品は左下側に表玄関と応接室、上側に水廻りと茶の間、女中室を配置し、それを縦廊下で接続、さらに右下側に配置した居間を中廊下で接続している住宅である。内玄関は勝手口に隣接しており、家族が主に使用する室に近接する内玄関と考えられる。

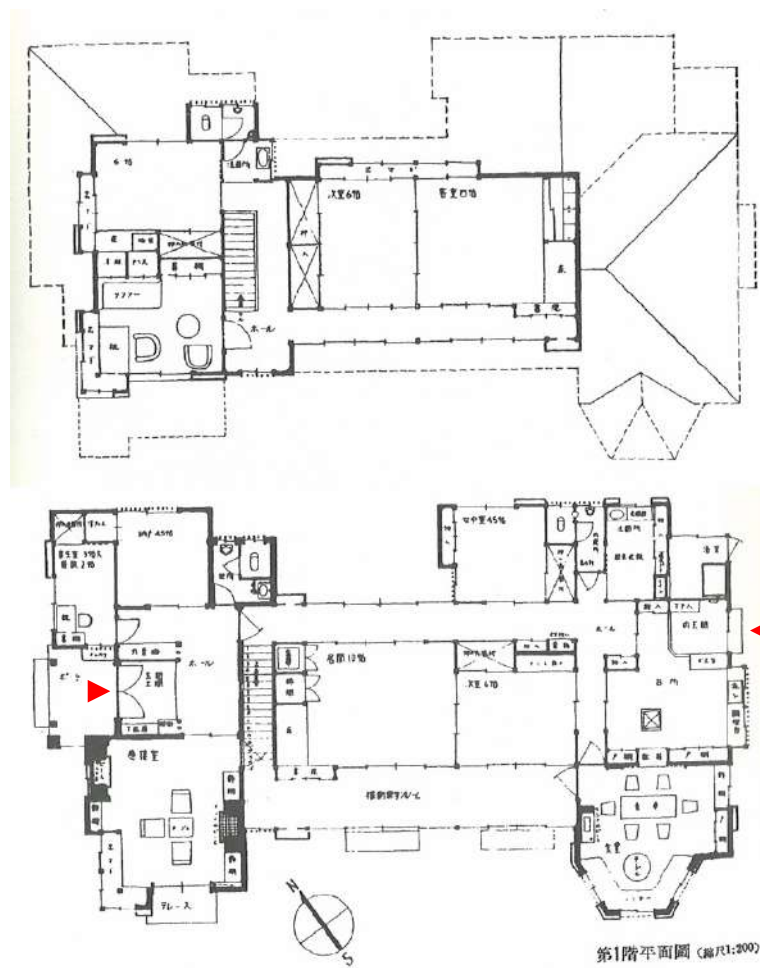


図2-20.表玄関と内玄関のみの例 (JU-1937-4-2-宮本邸-本間乙彦 延坪 90.52 坪)

図2-20は表玄関と内玄関のみのタイプの例である。これは、1937年4月に掲載された宮本邸で設計は本間乙彦である。この作品は北西に表玄関と応接室、南西に水廻りと食堂と配置し、それを中廊下と居間で接続している住宅である。内玄関は台所に内包されており、勝手口の役割を持っていると考えられる。

次に1931年以降に見られる表玄関と内玄関が近い作品と表玄関と内玄関が遠い作品の2パターンの相違について見ていく。

2-2 立面方向の分析（外観構成について）

前節までは平面図だけを用いて分析を行っていたが、本節からは写真や立面図、断面図を用いることで立面方向から表玄関と内玄関が近い作品と表玄関と内玄関が遠い作品の相違点について分析する。

2-2-1 外壁について

外壁の相違点を分析するにあたり、まず初めに平面図から大壁・真壁を判断した。次に写真と立面図から外壁の種類を判断した。写真からは漆喰やコンクリートのような混ぜられた素材か木材かを判断し、立面図からは外壁の表現が同じか違うかを判断した。つまり、平面図、立面図、写真から外壁が1種類で構成されているか、2種類以上で構成されているかを判断した。その結果を表2-3,2-4に示す。

表2-3.表玄関と内玄関が近い作品の外壁の内訳

番号 刊行年	刊行号	作品名	設計者名	坪数		外観(平面図)			外壁(写真、立面図)		
				建坪	延坪	大壁	真壁	2種類以上	1種類	2種類以上	不明
1917	1	岡崎久次郎邸	渡辺福三	103.00	103.00		●				●
1917	9	某氏邸	松井清足	168.00	197.00		●				●
1926	4	芹澤新平邸	あめりか屋	66.10	87.90			●		●	
1927	2	平田正之邸	—	46.80	59.80	●					●
1931	3	柳生義郎	あめりか屋	39.00	52.00	●					●
1931	3	要確認	—	141.00	181.00		●				●
1931	12	内藤博士邸	あめりか屋	42.00	78.00	●					●
1932	4	武居邸	池村元之助	64.10	103.20	●			●		
1932	6	篠原邸	あめりか屋	52.00	66.00	●					●
1934	2	日下邸	あめりか屋	62.20	88.10	●					●
1934	3	澤田邸	武田五一	79.50	115.30	●					●
1934	5	藤井博士邸	あめりか屋	83.50	104.80	●			●		
1934	9	我が家	武内貞義	49.00	70.00	●			●		
1934	11	上西邸	熊倉工務店	43.00	69.60	●			●		
1935	3	小林邸	あめりか屋	48.20	82.20	●			●		
1935	3	水谷邸	あめりか屋	32.70	48.30	●			●		
1935	4	松本兎象邸	松本兎象	50.10	75.70	●			●		
1935	4	K邸	白鳳社	56.70	67.30	●					●
1935	12	倉田邸	吉田五十八	40.00	51.50	●	●		●		
1936	4	前田邸	あめりか屋	38.00	59.70	●			●		
1936	6	T邸	白鳳社	49.10	74.00	●			●		
1936	6	中田邸	あめりか屋	49.80	65.80	●				●	
1936	6	内玄関と表玄関2	—	29.50	—	—	—	—	—	—	—
1936	6	内玄関と表玄関6	—	43.00	—	—	—	—	—	—	—
1936	7	某邸	あめりか屋	63.50	91.30	●			●		
1936	9	濱中邸	原田工務店	52.00	75.58	●			●		
1936	10	高田邸	あめりか屋	34.60	52.80	●	●				●
1936	11	藤宮邸	笹倉梅太郎	37.50	37.50	●	●				●
1937	4	中流住宅懸賞設計圖案5	牛尾巖作	47.20	47.20	●					●
1937	5	K邸	あめりか屋	42.40	66.10	●			●		
1937	6	松前邸	あめりか屋	41.80	70.80	●			●		
1937	8	稲葉邸	前田利八	59.70	82.60	●			●		
1937	10	武井邸	松岡誠一	41.02	55.46	●			●		
1937	10	上田邸	東京建物・前田利八	78.50	131.60	●			●		
1938	1	間島邸	三越住宅建築部	80.90	111.90	●					●
1938	2	長岡邸	天野正治	60.00	103.00	●					●
1938	2	柏木邸	東京建物・前田利八	63.50	91.20	●			●		
1938	6	N邸	伊藤元	67.50	82.00	●			●		
1939	1	肥田邸	小川安一郎	83.59	129.61	●			●		
1939	1	山川邸	堀口捨己	84.11	113.34	●			●		
1939	2	豊田邸	あめりか屋	59.00	86.00			●		●	
1939	3	岡田邸	前田利八	59.40	81.90	●			●		
1939	6	津川邸	伊藤元	42.10	61.20	●			●		
1939	6	安田邸	前田利八	53.30	109.90	●			●		
1939	6	H邸	大林組	81.08	129.55	●					●
1939	7	I邸	森下信太郎	43.00	55.50	●	●		●		
1939	11	S邸	今井兼次郎	127.50	158.90	●					●
1940	4	内本邸	あめりか屋大飯店	40.20	53.70	●			●		●
1940	8	島村邸	あめりか屋	47.70	59.90			●		●	
1940	9	楊井邸	前田利八	55.60	75.90	●			●		
1941	2	熊谷邸	石川恒雄	57.50	92.50	●			●		
1941	9	K邸	河合喜三郎	53.79	76.52	●			●		
1941	10	本間邸	前田利八	66.20	84.20	●			●		
1943	7	藤井邸	廣瀬初夫	37.20	45.37	●			●		

表 2-4.表玄関と内玄関が遠い作品の外壁の内訳

番号	刊行年	刊行号	作品名	設計者名	坪数		外観(平面図)			外壁(写真)	
					建坪	延坪	大壁	真壁	2種類以上	1種類	2種類以上
1919	5		川崎甲子雄	あめりか屋	53.00	80.00	●				●
1920	12		望月邸	あめりか屋	55.00	81.00			●		●
1921	6		佐々木邸	—	69.00	111.00	●				●
1921	7		岩永氏邸	—	31.70	59.70	●			●	
1924	9		田宮邸	あめりか屋	33.20	65.10	●				●
1929	2		上柳清助邸	あめりか屋	78.00	78.00	●				●
1929	8		中流住宅習作	風間二郎	—	—			●		●
1931	10		杉山義雄邸	大林組	63.30	111.60	●			●	
1931	11		橋本邸	あめりか屋	51.84	79.09	●				●
1932	2		本庄栄治郎邸	藤井厚二	134.00	245.70		●			●
1932	7		久保田邸	あめりか屋	50.90	73.20			●		●
1932	12		R邸	あめりか屋	38.20	57.70	●			●	
1933	1		白崎邸	あめりか屋	50.40	70.80	●			●	
1933	2		西浦邸	あめりか屋	45.60	66.10	●			●	
1933	7		封川居対談	あめりか屋 井村健次郎	56.00	93.00	●				●
1933	11		N邸	白鳳社	71.50	131.00	●			●	
1934	6		木村邸	中西六郎	60.40	117.10	●			●	
1934	7		黒川邸	あめりか屋	32.40	48.50	●			●	
1934	7		徳永邸	石川禎一郎	62.50	82.50			●		●
1934	10		今西邸	あめりか屋	38.40	52.50			●		●
1934	11		我が家を語る	大澤源之助	39.80	51.80			●		●
1934	12		木村邸	あめりか屋	32.00	44.60	●			●	
1935	3		小川邸	小川安一郎	55.00	78.00	●			●	
1935	3		川上邸	狩野春一	44.60	63.80	●			●	
1935	7		角倉邸	宮後光三	69.50	113.00	●				●
1935	10		星野邸	大阪三越住宅部	55.70	76.20	●				●
1936	5		山田邸	あめりか屋	46.80	78.10	●				●
1936	6		内玄関と表玄関1	—	25.00	—	—	—	—	—	—
1937	2		高橋邸	狩野春一	55.90	85.70	●			●	
1937	5		小宅邸	あめりか屋	58.40	78.50	●			●	
1937	7		横河時介邸	横河時介	58.00	102.50	●			●	
1937	7		山口邸	山口諭助	62.00	84.00	●			●	
1937	9		K邸の庭	金岡養樹園	—	—	●			●	
1938	1		浜田邸	福中駒吉	152.50	211.90	●				●
1938	1		A邸	あめりか屋	53.40	79.60			●		●
1938	2		津田邸	あめりか屋	44.16	65.66	●				●
1938	8		T邸	小川安一郎	97.60	181.00	●		●		
1938	9		喜多村邸	前田利八	59.89	76.77			●		●
1939	3		H邸	安井武雄	73.30	111.30	●			●	
1939	9		菊池邸	矢部金太郎	100.00	132.50		●		●	
1939	9		K邸	阪口貞一郎	138.00	174.00		●			●
1940	6		我が家	—	41.00	41.00		●			●
1940	12		喜多羅邸	あめりか屋	62.47	85.62			●		●
1941	6		T邸	宇賀一郎	72.00	72.00	●				●
1942	4		I邸	伊藤元	43.00	61.00			●		●

表 2-3.2-4 は、ともに外壁が何種類で構成されているかを示した表であり、赤丸は外壁が2種類以上で構成されていることを示している。赤丸の外壁（平面図）は外壁が大壁と真壁の2種類で構成されていることを示しており、外壁（写真）は写真と立面図から外壁が2種類以上で構成されていると判断できたものを示している。

2種類以上の外壁で構成されているものは、表 2-3（表玄関と内玄関が近い作品）においては54作品の内、平面図からは3作品、写真からは4例、平面図と写真の両方を考慮すると4例確認でき、表 2-4（表玄関と内玄関が遠い作品）においては45例の内、平面図からは10例、写真からは9例、平面図と写真の両方を考慮すると14例確認できる。

次に外壁の構成と出入口の配置の関係を図 2-21,2-22 に示す

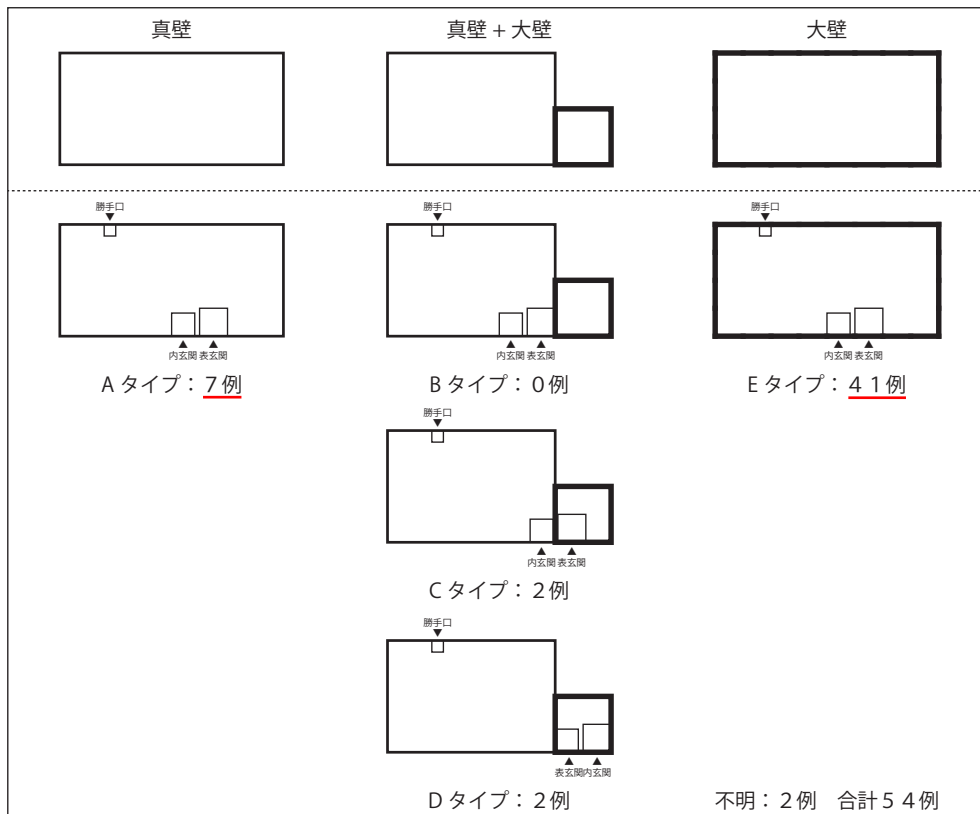


図 2-21.外壁と出入口の配置関係(表玄関と内玄関が近い作品)

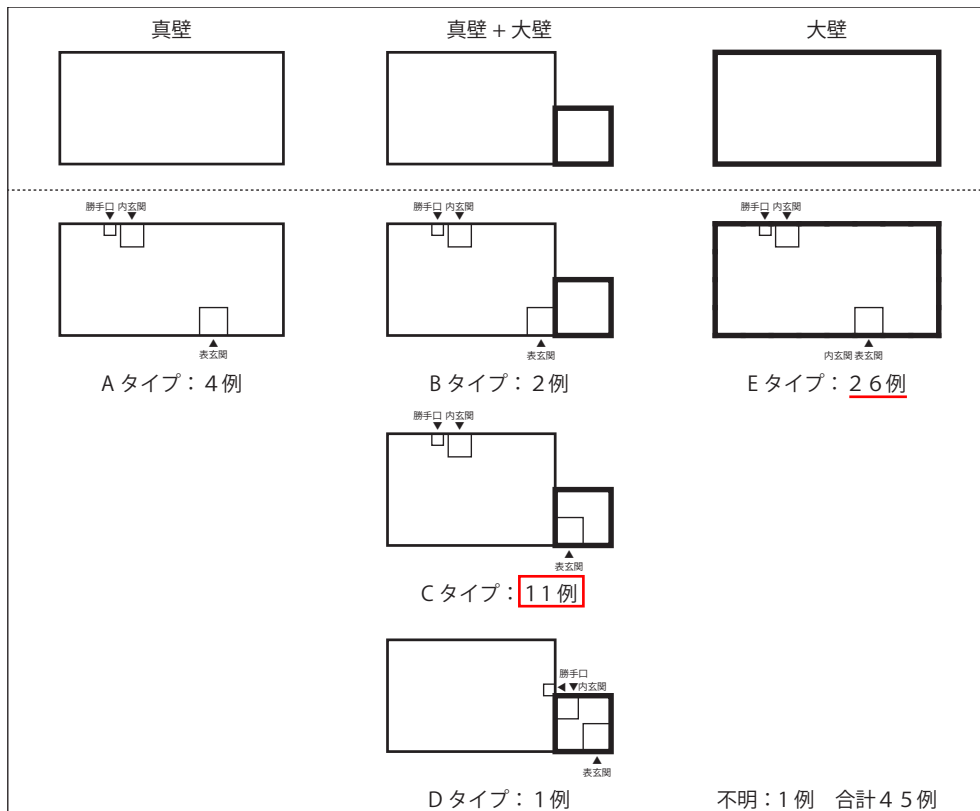


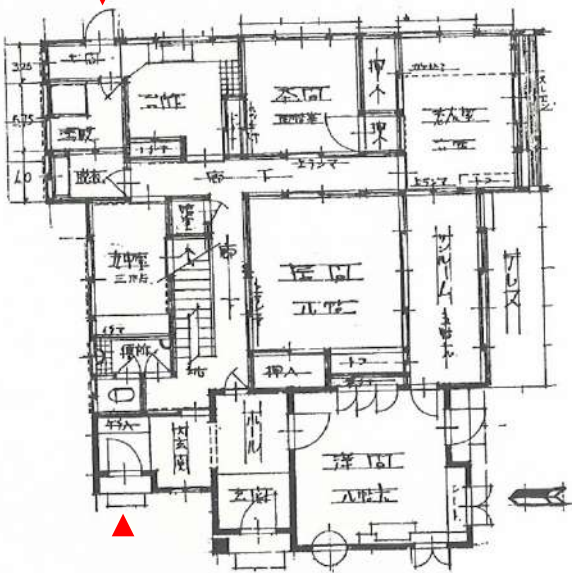
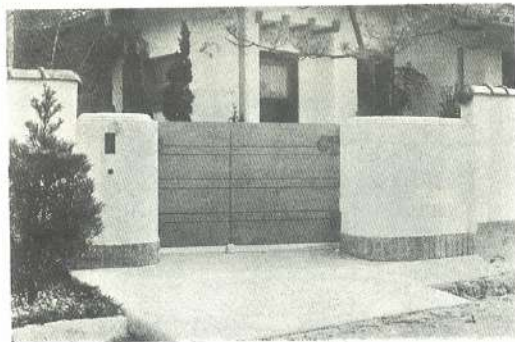
図 2-22.外壁と出入口の配置関係(表玄関と内玄関が遠い作品)

図 2-21.2-22 は、外壁と出入口の配置関係を A～E までのタイプに分けて分析した図である。A は、外壁が真壁 1 種類のみで構成され、出入口を真壁の建物内に配置したタイプである。B～D は、真壁と大壁の 2 種類で構成され、B は、出入口を真壁の建物内に配置したタイプ、C は、表玄関を大壁の建物内に配置し、内玄関と勝手口は真壁の建物内に配置したタイプ、D は、表玄関と内玄関を大壁の建物内に配置し、勝手口を真壁の建物内に配置したタイプである。E は、外壁が大壁 1 種類のみで構成され、出入口を大壁の建物内に配置したタイプである。

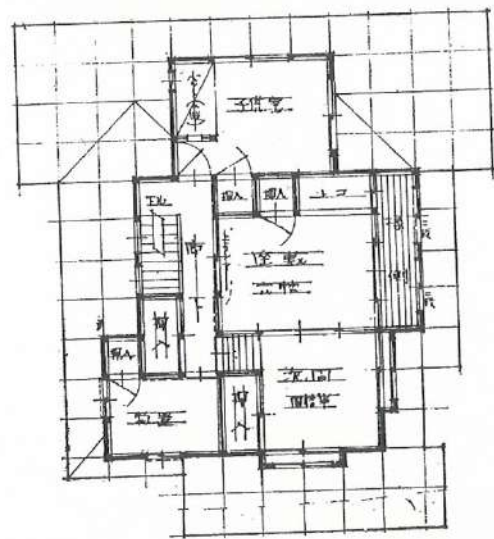
この結果から、表玄関と内玄関が近い作品は外壁を 1 種類で構成し、反対に表玄関と内玄関が遠い作品は外壁を 2 種類以上使い分けて構成する傾向がある。

また図 2-22 の C タイプのように大壁の洋館を設置した場合、表玄関は洋館に配置され、内玄関と勝手口は真壁の和館に配置される傾向が明らかである。

以下に例をいくつかあげる。

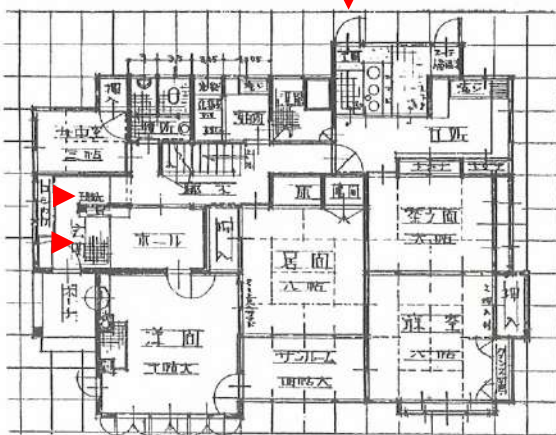
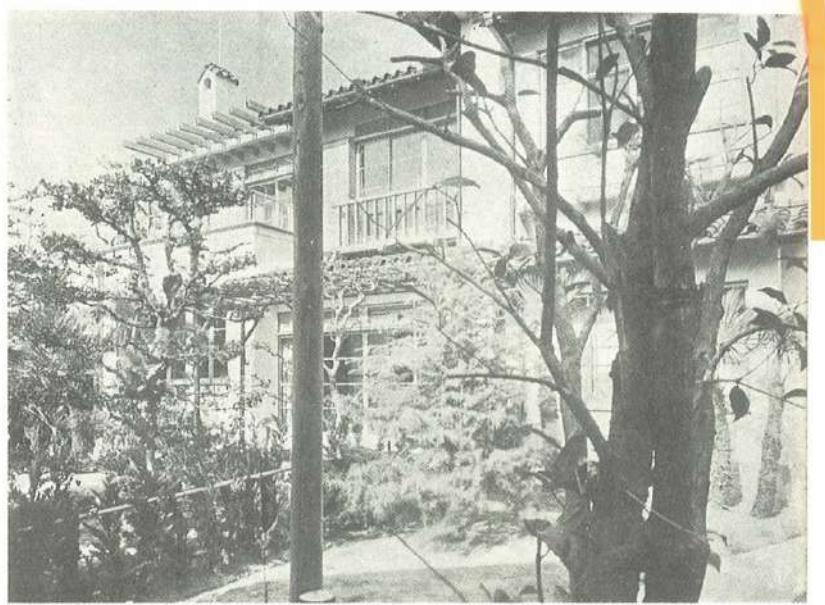


第一階平面圖 (二百分の一)

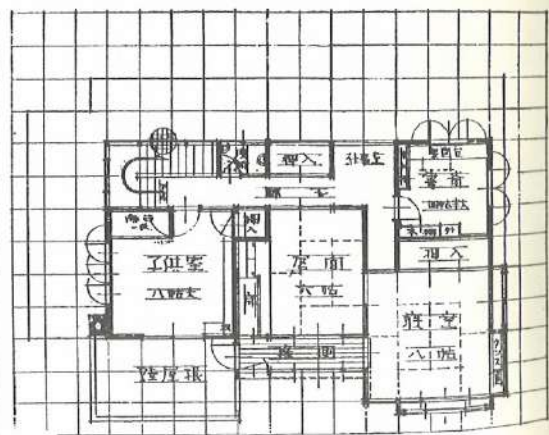


第二階平面圖

図2-24.表玄関と内玄関が近い作品の例 (外壁は1種類で構成) (JU-1935-3-6-水谷邸-あめりか屋)



第1階平面圖 (縮尺1:200)



第2階平面圖

図 2-25.表玄関と内玄関が近い作品の例 (外壁は1種類で構成) (JU-1936-4-4-前田邸-あめりか屋)

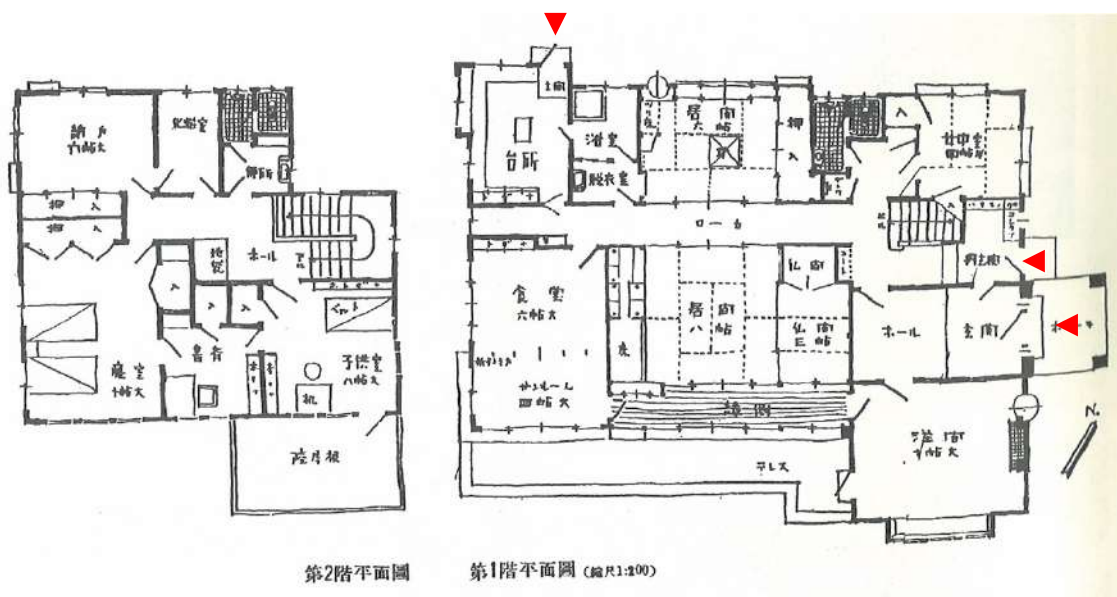


図 2-26.表玄関と内玄関が近い作品の例 (外壁は1種類で構成) (JU-1937-5-6-K 邸-あめりか屋)

○表玄関と内玄関が遠い作品の例（外壁は2種類以上で構成）

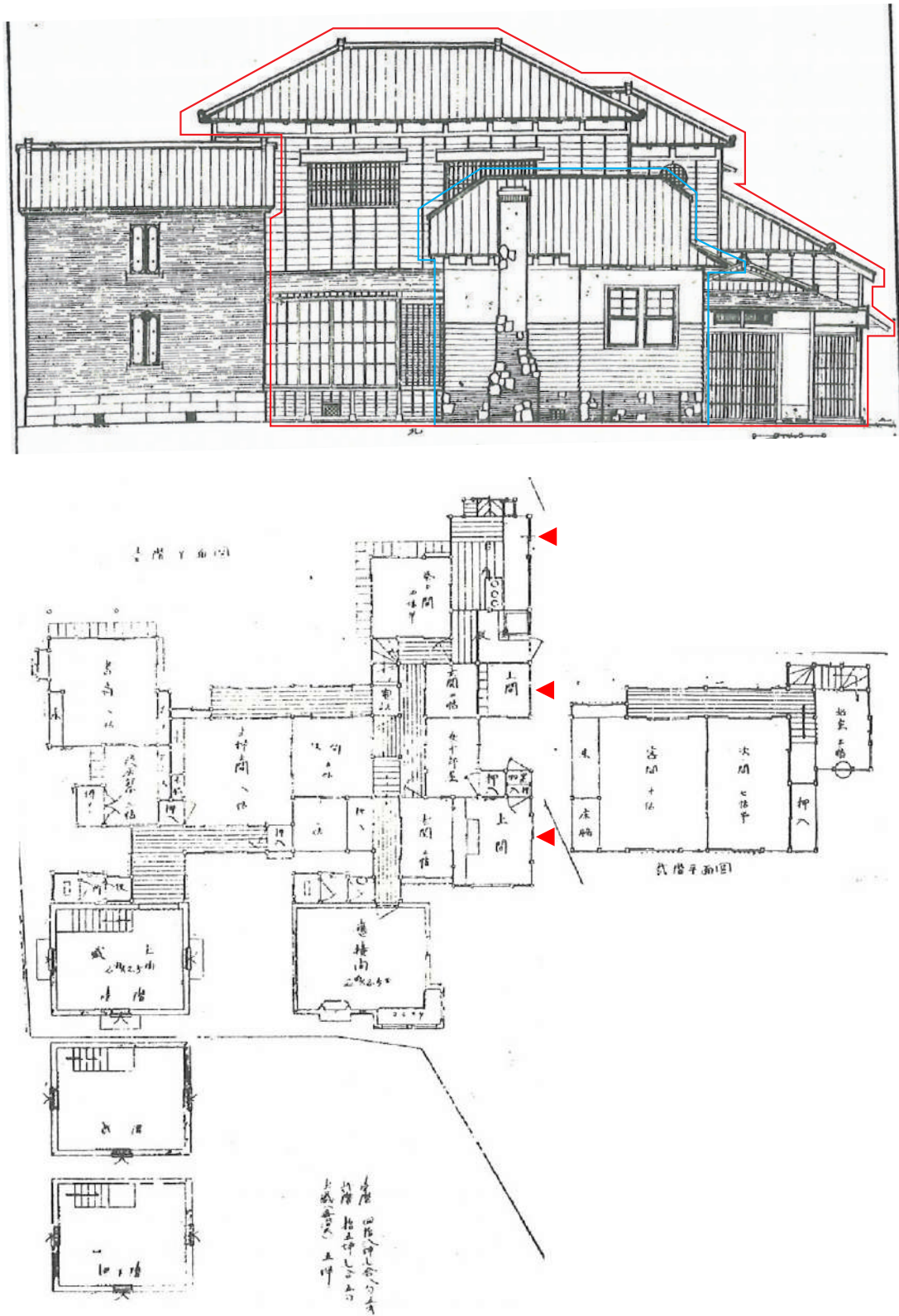


図 2-27.表玄関と内玄関が遠い作品の例（外壁は2種類以上で構成）(JU-1920-12-2-望月邸-あめりか屋)

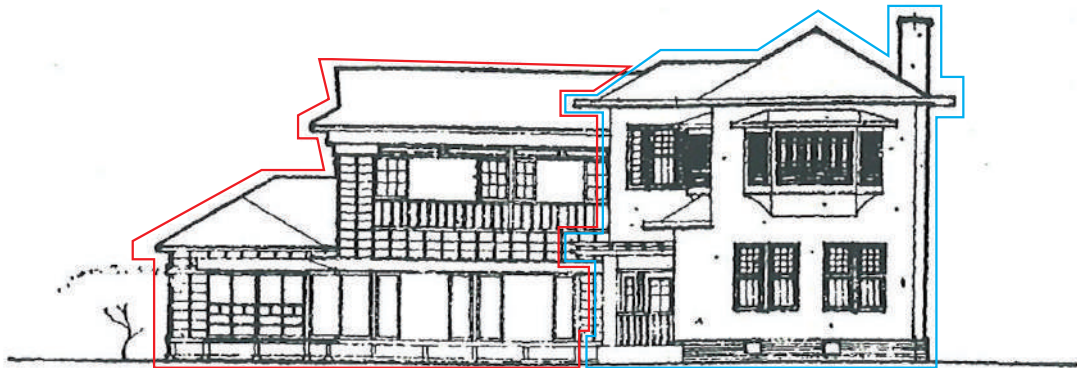
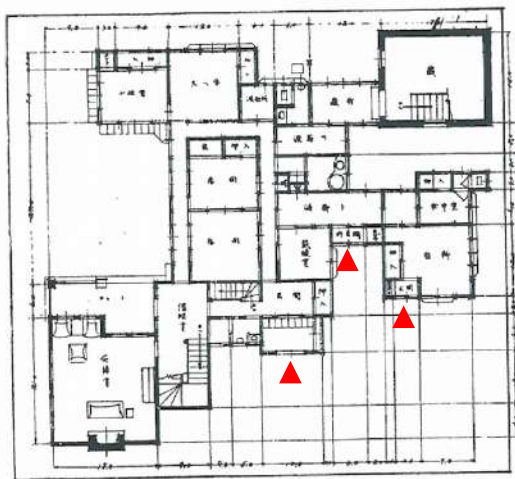
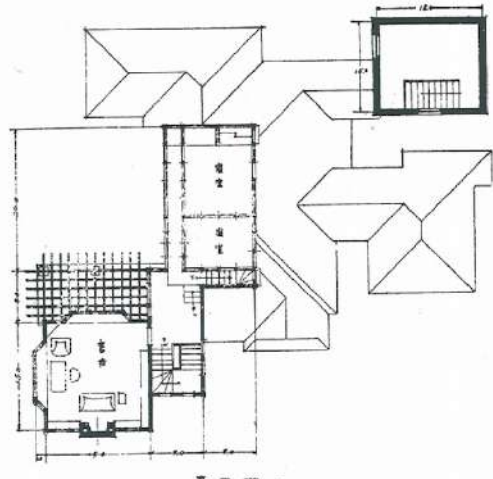


圖 面 立



面甲階一



面平階二

図 2-28.表玄関と内玄関が遠い作品の例（外壁は2種類以上で構成）（JU-1924-9-2-田宮邸-あめりか屋）

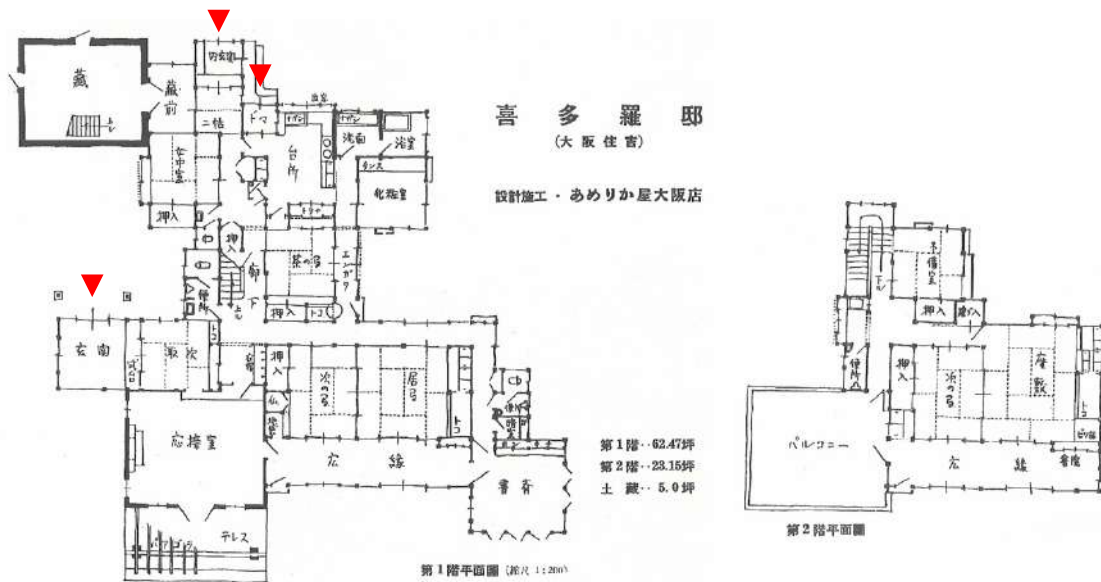
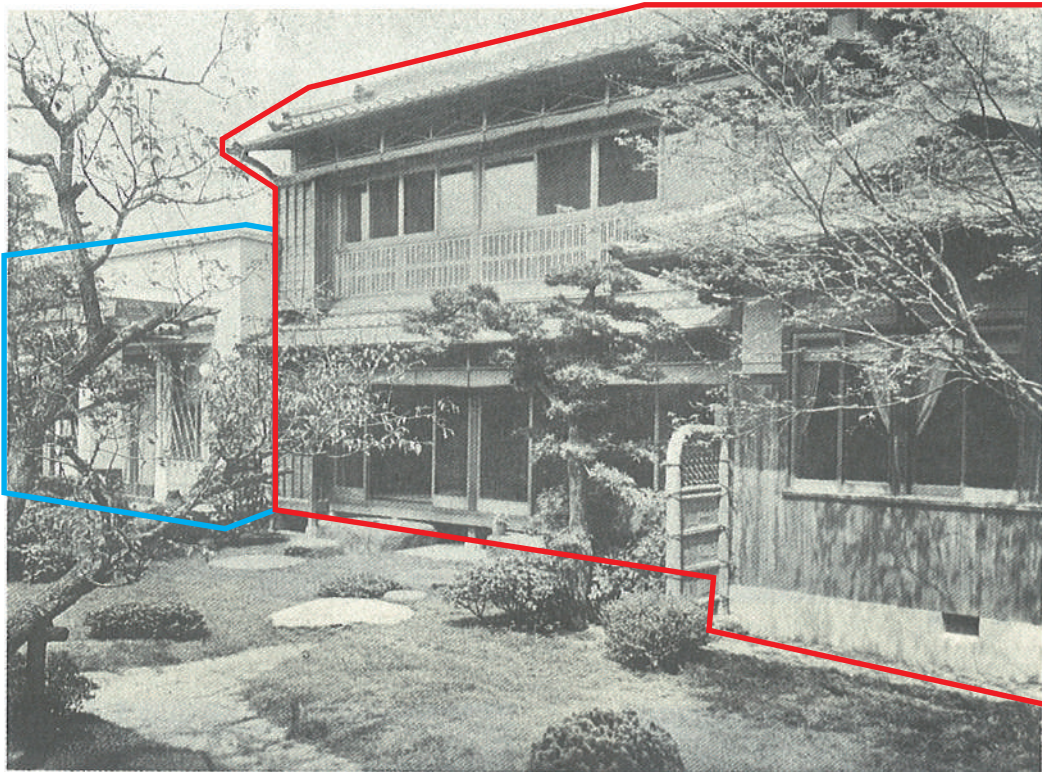
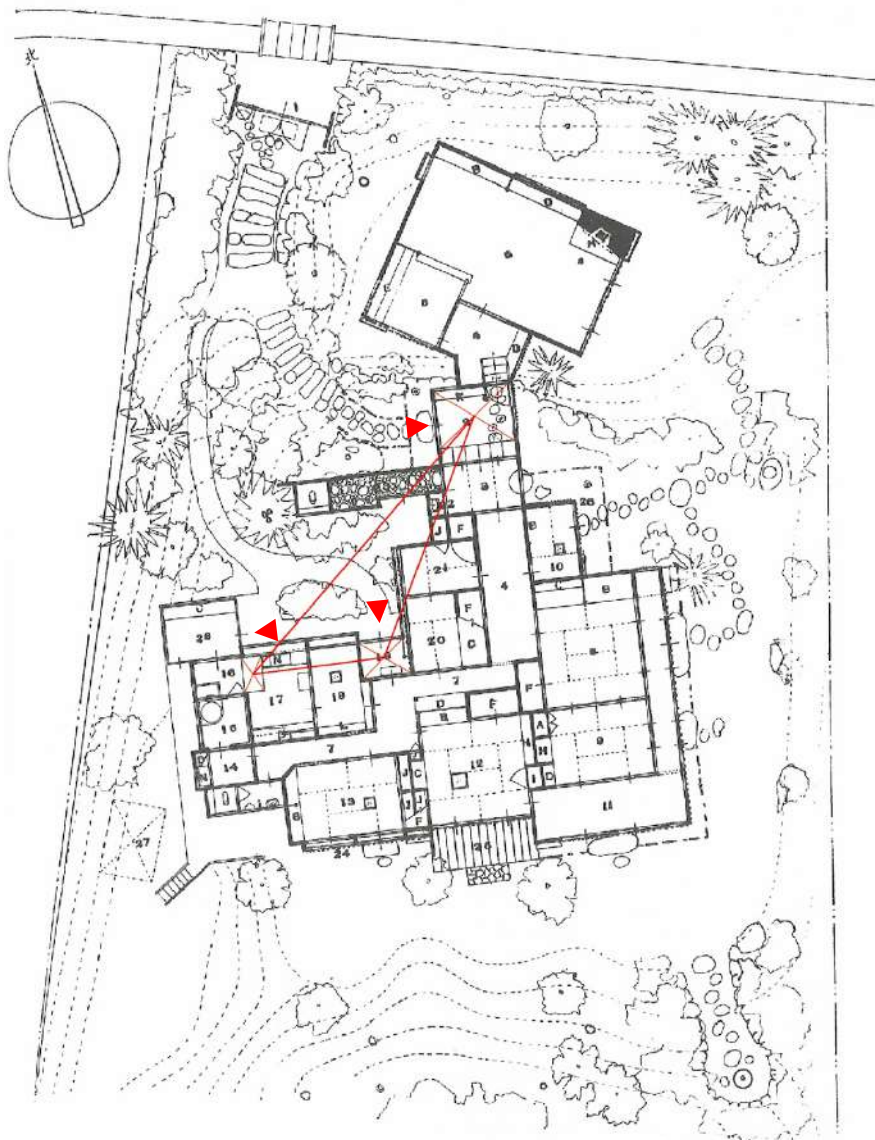
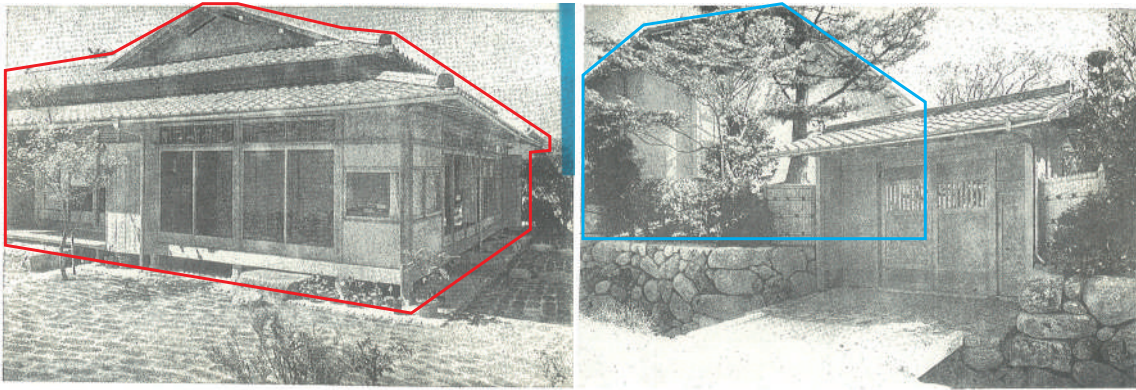


図 2-29.表玄関と内玄関が遠い作品の例 (外壁は2種類以上で構成) (JU-1940-12-4-喜多羅邸-あめりか屋)



平面図 (縮尺 1:200) 棟坪・72.0坪

図 2-30.表玄関と内玄関が遠い作品の例 (外壁は2種類以上で構成) (JU-1941-6-1-T邸・宇賀一郎)

2-2-2 建具について

外壁についている表玄関・内玄関の建具について分析する。平面図から開戸・引戸だけを判断していく。その結果を表2-5,2-6に示す。黒丸は表玄関と内玄関の建具の種類が同じことを表し、赤丸は表玄関と内玄関で建具の種類が異なることを表している。

表2-5.表玄関と内玄関が近い作品の建具の内訳

番号	刊行年	刊行号	作品名	設計者名	坪数		表玄関		内玄関	
					建坪	延坪	開戸	引戸	開戸	引戸
1917	1		岡崎久次郎邸	渡辺福三	103.00	103.00		●		●
1917	9		某氏邸	松井清足	168.00	197.00		●		●
1926	4		芹澤新平邸	あめりか屋	66.10	87.90	●		●	
1927	2		平田正之邸	—	46.80	59.80	●		●	
1931	3		柳生義郎	あめりか屋	39.00	52.00		●		●
1931	3		要確認	—	141.00	181.00		●		●
1931	12		内藤博士邸	あめりか屋	42.00	78.00	●		●	
1932	4		武居邸	池村元之助	64.10	103.20	●			●
1932	6		篠原邸	あめりか屋	52.00	66.00	●		●	
1934	2		日下邸	あめりか屋	62.20	88.10	●			●
1934	3		澤田邸	武田五一	79.50	115.30	●		●	
1934	5		藤井博士邸	あめりか屋	83.50	104.80		●		●
1934	9		我が家	武内貞義	49.00	70.00		●		●
1934	11		上西邸	熊倉工務店	43.00	69.60	●		●	
1935	3		小林邸	あめりか屋	48.20	82.20	●			●
1935	3		水谷邸	あめりか屋	32.70	48.30	●		●	
1935	4		松本兎象邸	松本兎象	50.10	75.70	●		●	
1935	4		K邸	白鳳社	56.70	67.30		●		●
1935	12		倉田邸	吉田五十八	40.00	51.50		●		●
1936	4		前田邸	あめりか屋	38.00	59.70	●		●	
1936	6		T邸	白鳳社	49.10	74.00	●		●	
1936	6		中田邸	あめりか屋	49.80	65.80	●		●	
1936	6		内玄関と表玄関2	—	29.50	—	●		●	
1936	6		内玄関と表玄関6	—	43.00	—		●		●
1936	7		某邸	あめりか屋	63.50	91.30	●			●
1936	9		濱中邸	原田工務店	52.00	75.58	●		●	
1936	10		高田邸	あめりか屋	34.60	52.80	●		●	
1936	11		藤富邸	笹倉梅太郎	37.50	37.50	●		●	
1937	4		中流住宅懸賞設計圖案5	牛尾巖作	47.20	47.20		●		●
1937	5		K邸	あめりか屋	42.40	66.10	●		●	
1937	6		松前邸	あめりか屋	41.80	70.80	●		●	
1937	8		稲葉邸	前田利八	59.70	82.60	●			●
1937	10		武井邸	松岡誠一	41.02	55.46		●		●
1937	10		上田邸	東京建物・前田利八	78.50	131.60	●		●	
1938	1		間島邸	三越住宅建築部	80.90	111.90	●		●	
1938	2		長岡邸	天野正治	60.00	103.00	●		●	
1938	2		柏木邸	東京建物・前田利八	63.50	91.20	●		●	
1938	6		N邸	伊藤元	67.50	82.00	●		●	
1939	1		肥田邸	小川安一郎	83.59	129.61	●		●	
1939	1		山川邸	堀口捨己	84.11	113.34	—	—	—	—
1939	2		豊田邸	あめりか屋	59.00	86.00	●			●
1939	3		岡田邸	前田利八	59.40	81.90	●			●
1939	6		津川邸	伊藤元	42.10	61.20	●			●
1939	6		安田邸	前田利八	53.30	109.90	●		●	
1939	6		H邸	大林組	81.08	129.55		●		●
1939	7		I邸	森下信太郎	43.00	55.50	●		●	
1939	11		S邸	今井兼次郎	127.50	158.90	●			●
1940	4		内本邸	あめりか屋大阪店	40.20	53.70	●			●
1940	8		島村邸	あめりか屋	47.70	59.90	●			●
1940	9		楊井邸	前田利八	55.60	75.90		●		●
1941	2		熊谷邸	石川恒雄	57.50	92.50	●		●	
1941	9		K邸	河合善三郎	53.79	76.52		●		●
1941	10		本間邸	前田利八	66.20	84.20	●			●
1943	7		藤井邸	廣瀬初夫	37.20	45.37		●		●

表 2-6.表玄関と内玄関が遠い作品の建具の種類の内訳

番号	刊行年	刊行号	作品名	設計者名	坪数		表玄関		内玄関	
					建坪	延坪	開戸	引戸	開戸	引戸
1919	5		川崎甲子雄	あめりか屋	53.00	80.00	●			●
1920	12		望月邸	あめりか屋	55.00	81.00		●		●
1921	6		佐々木邸	—	69.00	111.00				●
1921	7		岩永氏邸	—	31.70	59.70	●			●
1924	9		田宮邸	あめりか屋	33.20	65.10		●		●
1929	2		上柳清助邸	あめりか屋	78.00	78.00	●			●
1929	8		中流住宅習作	風間二郎	—	—	—	—	—	—
1931	10		杉山義雄邸	大林組	63.30	111.60	●			●
1931	11		橋本邸	あめりか屋	51.84	79.09	—	—		●
1932	2		本庄栄治郎邸	藤井厚二	134.00	245.70	●			●
1932	7		久保田邸	あめりか屋	50.90	73.20	●			●
1932	12		R邸	あめりか屋	38.20	57.70	●			●
1933	1		白崎邸	あめりか屋	50.40	70.80	●			●
1933	2		西浦邸	あめりか屋	45.60	66.10		●		●
1933	7		封川居対談	あめりか屋 井村健次郎	56.00	93.00	●			●
1933	11		N邸	白鳳社	71.50	131.00	●			●
1934	6		木村邸	中西六郎	60.40	117.10	●			●
1934	7		黒川邸	あめりか屋	32.40	48.50	●			●
1934	7		徳永邸	石川禎一郎	62.50	82.50		●		●
1934	10		今西邸	あめりか屋	38.40	52.50	●			●
1934	11		我が家を語る	大澤瀧之助	39.80	51.80	●			●
1934	12		木村邸	あめりか屋	32.00	44.60	●			●
1935	3		小川邸	小川安一郎	55.00	78.00		●		●
1935	3		川上邸	狩野春一	44.60	63.80	●			●
1935	7		角倉邸	宮後光三	69.50	113.00		●		●
1935	10		星野邸	大阪三越住宅部	55.70	76.20	●			●
1936	5		山田邸	あめりか屋	46.80	78.10	●			●
1936	6		内玄関と表玄関1	—	25.00	—	●			●
1937	2		高橋邸	狩野春一	55.90	85.70	●			●
1937	5		小宅邸	あめりか屋	58.40	78.50	●			●
1937	7		横河時介邸	横河時介	58.00	102.50		●		●
1937	7		山口邸	山口諭助	62.00	84.00	●			●
1937	9		K邸の庭	金岡養樹園	—	—	●			●
1938	1		浜田邸	福中駒吉	152.50	211.90		●		●
1938	1		A邸	あめりか屋	53.40	79.60	●			●
1938	2		津田邸	あめりか屋	44.16	65.66		●		●
1938	8		T邸	小川安一郎	97.60	181.00	●			●
1938	9		喜多村邸	前田利八	59.89	76.77	●			●
1939	3		H邸	安井武雄	73.30	111.30		●		●
1939	9		菊池邸	矢部金太郎	100.00	132.50		●		●
1939	9		K邸	阪口貞一郎	138.00	174.00		●		●
1940	6		我が家	—	41.00	41.00		●		●
1940	12		喜多羅邸	あめりか屋	62.47	85.62		●		●
1941	6		T邸	宇賀一郎	72.00	72.00		●		●
1942	4		I邸	伊藤元	43.00	61.00	●			●

表 2-5,2-6 は、表玄関と内玄関が近い作品、表玄関と内玄関が遠い作品の表玄関と内玄関の建具の種類の内訳を示した表である。黒丸は表玄関と内玄関の建具の種類が同じことを表しており、赤丸は表玄関と内玄関で建具の種類が異なることを表している。

表玄関と内玄関が近い作品は、表玄関と内玄関の建具の種類を揃える傾向があり、表玄関と内玄関が遠い作品は、そこまで揃えることを意識していないことがわかる。また表玄関では開戸が多く用いられ、内玄関では引戸が多く用いられる傾向があることがわかる。

さらに表玄関と内玄関が近い作品に関して言えば、表玄関と内玄関が隣接（表玄関と内玄関が角と角以上の場所で接触している）関係のときは非隣接（表玄関と内玄関の間に何か空間がある）関係のときよりも表玄関と内玄関の建具の種類を統一する傾向がある（表 2-7）。

表 2-7. 表玄関と内玄関に近い作品の表玄関と内玄関の建具を統一するかないかの表

番号		作品名	設計者名	坪数		配置				
発行年	発行号			建坪	延坪	一体	隣接(同じ面)	隣接(違う面)	分離(同じ面)	分離(違う面)
1917	1	岡崎久次郎邸	渡辺福三	103.00	103.00		●			
1917	9	某氏邸	松井清足	168.00	197.00			●		
1926	4	芹澤新平邸	あめりか屋	66.10	87.90		●			
1931	3	要確認	—	141.00	181.00		●			
1932	6	徳原邸	あめりか屋	52.00	66.00		●			
1934	2	臼下邸	あめりか屋	62.20	88.10		●			
1934	3	澤田邸	武田五一	79.50	115.30		●			
1934	5	藤井博士邸	あめりか屋	83.50	104.80		●			
1934	11	上西邸	熊倉工務店	43.00	69.60		●			
1935	12	倉田邸	吉田五十八	49.00	51.50			●		
1936	4	前田邸	あめりか屋	38.00	59.70	●				
1936	6	T邸	白鳳社	49.10	74.00		●			
1936	6	中田邸	あめりか屋	49.80	65.80			●		
1936	6	内玄関と表玄関?	—	29.50	—		●			
1936	6	内玄関と表玄関?	—	43.00	—	●				
1936	9	濱中邸	原田工務店	52.00	75.58		●			
1936	10	高田邸	あめりか屋	34.60	52.80		●			
1936	11	藤宮邸	笹倉梅太郎	37.50	37.50		●			
1937	4	中流住宅懸賞設計図案5	牛尾厳作	47.20	47.20			●		
1937	5	K邸	あめりか屋	42.40	66.10		●			
1937	6	松前邸	あめりか屋	41.80	70.80		●			
1937	10	武井邸	松岡誠一	41.02	55.46		●			
1937	10	上田邸	東京建物・前田利八	78.50	131.60			●		
1938	1	間島邸	三越住宅建築部	80.90	111.90		●			
1938	2	長岡邸	天野正治	69.00	103.00		●			
1938	2	柏木邸	東京建物・前田利八	63.50	91.20			●		
1939	1	肥田邸	小川安一郎	83.59	129.61			●		
1939	2	豊田邸	あめりか屋	59.00	86.00		●			
1939	3	岡田邸	前田利八	59.40	81.90			●		
1939	6	安田邸	前田利八	53.30	109.90			●		
1939	6	H邸	大林組	81.08	129.55		●			
1939	7	I邸	森下信太郎	43.00	55.50		●			
1939	11	S邸	今井兼次郎	127.50	158.90		●			
1940	4	内本邸	あめりか屋大阪店	40.20	53.70			●		
1940	8	島村邸	あめりか屋	47.70	59.90		●			
1941	2	熊谷邸	石川恒雄	57.50	92.50		●			
1941	9	K邸	河合喜三郎	53.79	76.52		●			
1943	7	藤井邸	廣瀬切夫	37.20	45.37		●			

番号		作品名	設計者名	坪数		配置				
発行年	発行号			建坪	延坪	一体	隣接(同じ面)	隣接(違う面)	非隣接(同じ面)	非隣接(違う面)
1927	2	平田正之邸	—	48.80	59.80				●	
1931	3	柳生義郎	あめりか屋	39.00	52.00					●
1931	12	内藤博士邸	あめりか屋	42.00	78.00					●
1932	4	武居邸	池村元之助	64.10	103.20				●	
1934	9	我が家	武内貞義	49.00	70.00					●
1935	3	小林邸	あめりか屋	43.20	82.20				●	
1935	3	水谷邸	あめりか屋	32.70	48.30				●	
1935	4	松本亮象邸	松本亮象	50.10	75.70				●	
1935	4	K邸	白鳳社	56.70	67.30				●	
1936	7	某邸	あめりか屋	63.50	91.30				●	
1937	8	稲葉邸	前田利八	58.70	82.60				●	
1938	6	N邸	伊藤元	67.50	82.00				●	
1939	1	山川邸	堀口捨己	84.11	113.34				●	
1939	6	津川邸	伊藤元	42.10	61.20					●
1940	9	楊井邸	前田利八	55.60	75.90					●
1941	10	本間邸	前田利八	66.20	84.20					●

表 2-7 は表玄関と内玄関に近い作品において、表玄関と内玄関の建具の種類を統一するかないかを示した表である。この表の上側は表玄関と内玄関が隣接（表玄関と内玄関が角と角以上の場所で接触している）関係にある場合だけを示し、下側は表玄関と内玄関が非隣接（表玄関と内玄関の間に何か空間がある）関係にある場合だけを示している。また黒丸は表玄関と内玄関の建具の種類を統一しており、赤丸は表玄関と内玄関の建具の種類が異なることを示している。

表玄関と内玄関が隣接関係のときは表玄関と内玄関の建具の種類を比較的統一する傾向があり、非隣接関係のときは表玄関と内玄関の建具の種類を統一しない傾向がある。

表玄関と内玄関の建具の種類を統一するかないかは同じ面に表玄関と内玄関を設置するかよりも表玄関と内玄関の距離に関係することがわかる。

以下に事例をいくつか載せる。

○表玄関と内玄関が近い作品（建具の種類を揃える例）

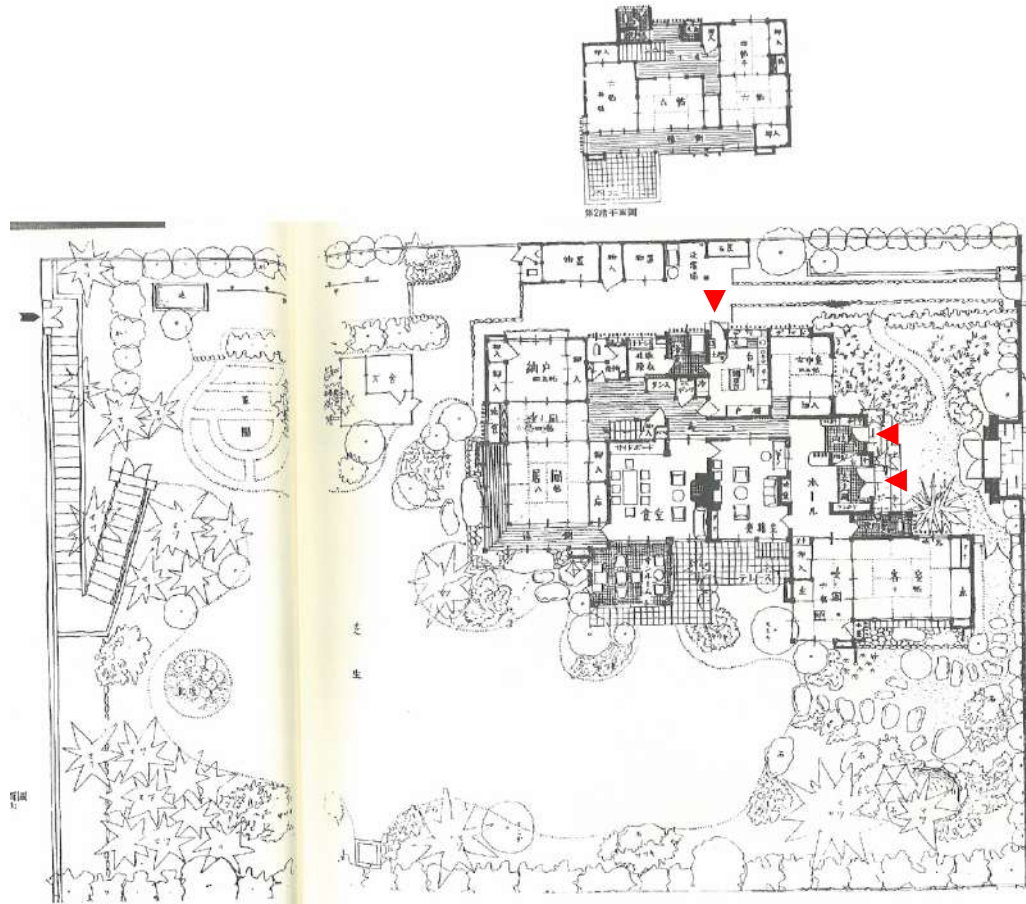


図 2-31.表玄関と内玄関が近い作品（建具の種類を揃える例）(JU-1938-1-6-間島邸-三越住宅建築部)

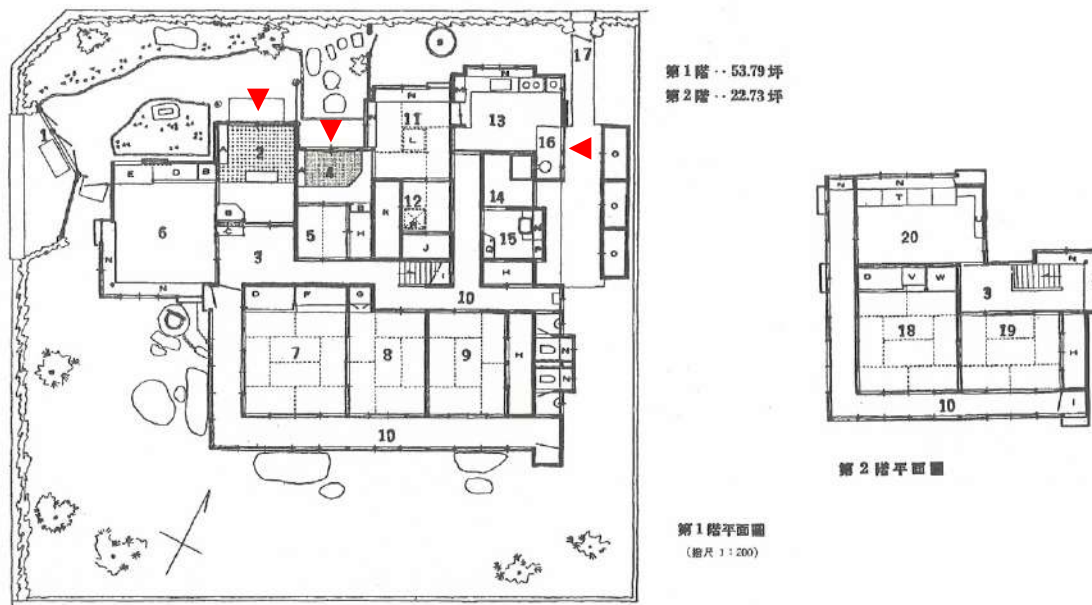


図 2-32.表玄関と内玄関が近い作品（建具の種類を揃える例）(JU-1941-9-4-K 邸-河合喜三郎)

○表玄関と内玄関が近い作品（建具の種類が異なる例）

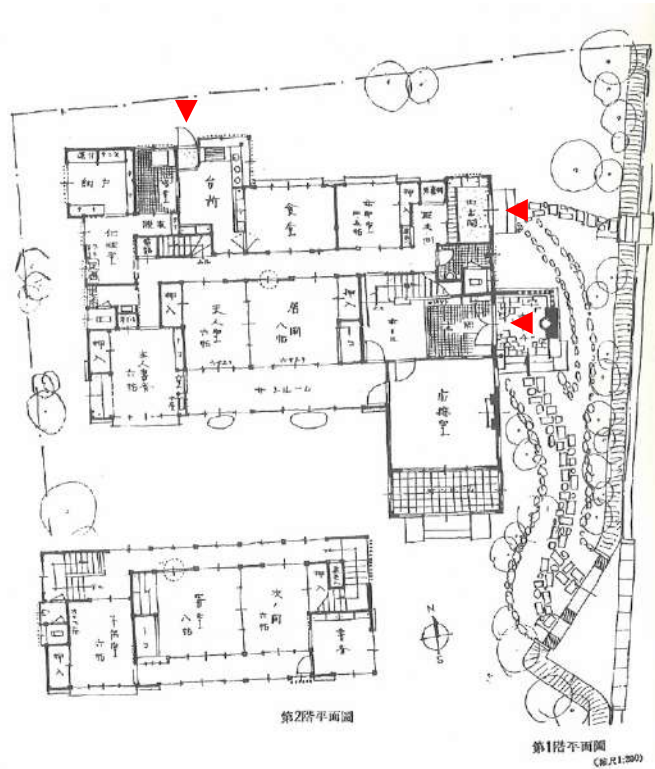


図 2-33.表玄関と内玄関が近い作品（建具の種類が異なる例）(JU-1937-8-6-稲葉邸-前田利八)

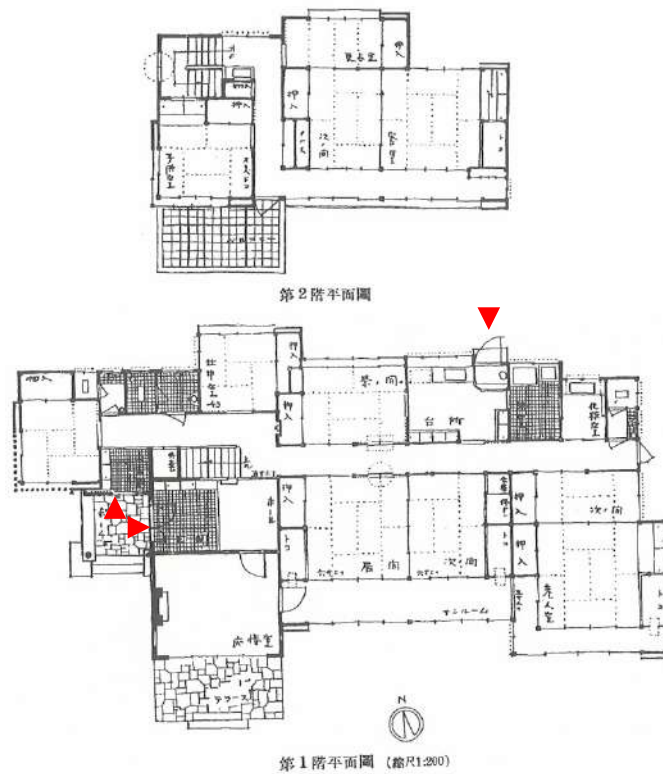


図 2-34.表玄関と内玄関が近い作品（建具の種類が異なる例）(JU-1939-3-6-岡田邸-前田利八)

○表玄関と内玄関が遠い作品（建具の種類が異なる例）

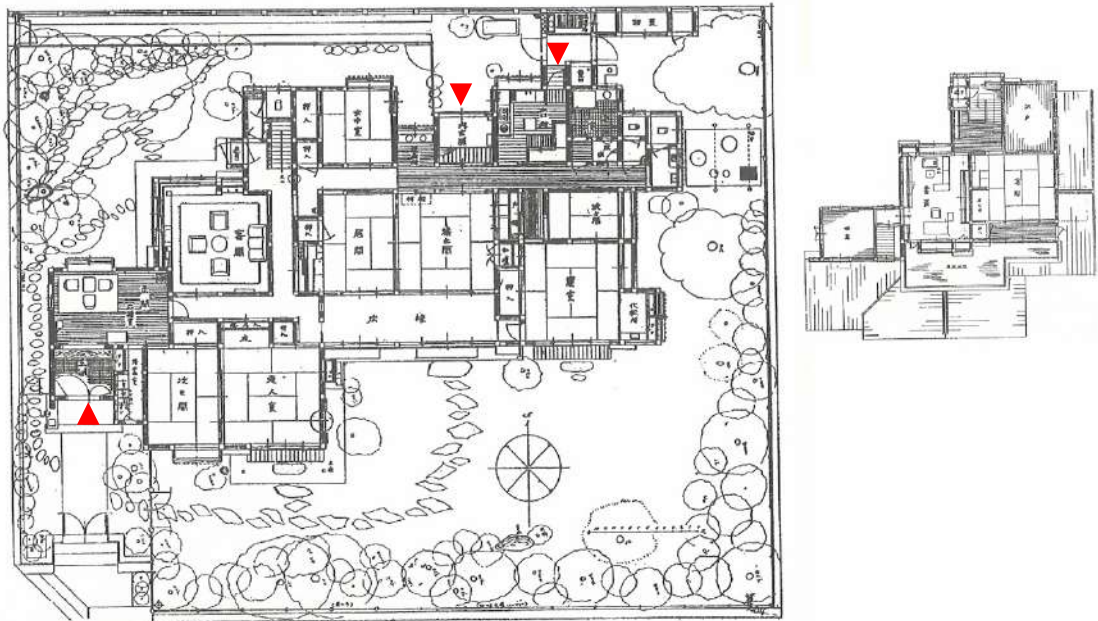


図 2-35.表玄関と内玄関が遠い作品（建具の種類が異なる例）(JU-1937-7-5-山口邸-山口諭助)

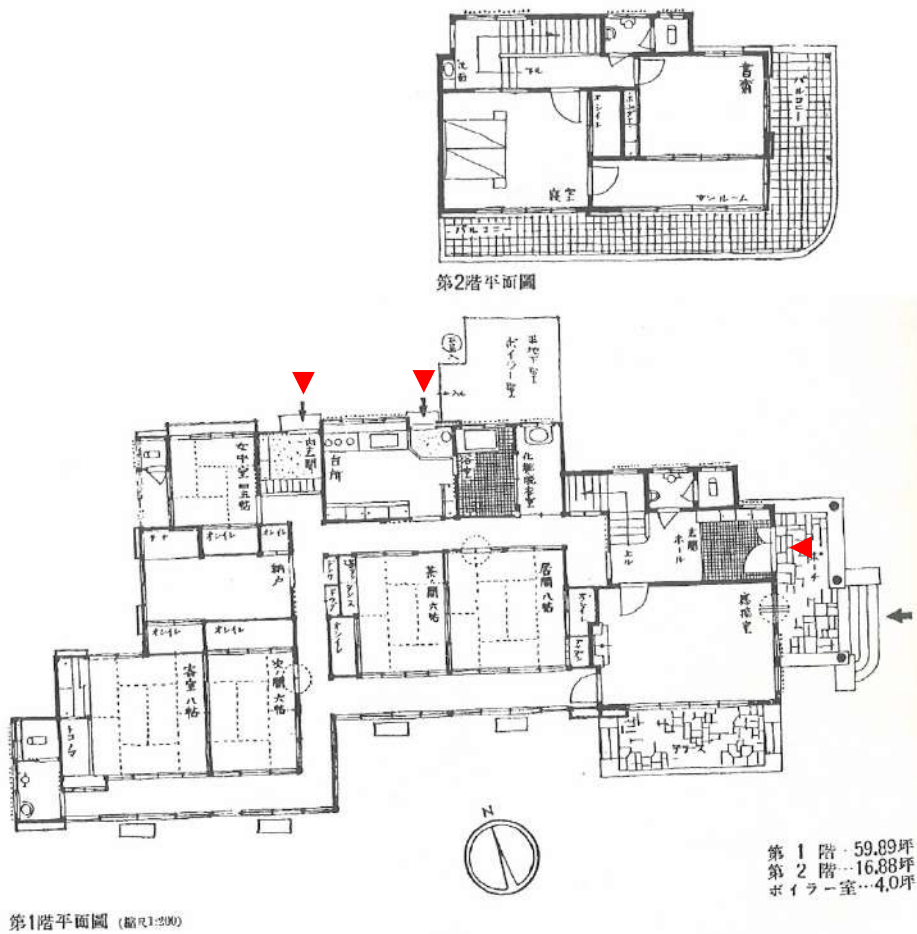


図 2-36.表玄関と内玄関が遠い作品（建具の種類が異なる例）(JU-1938-9-7-喜多村邸-前田利八)

外壁の構成と建具の種類は2つの点から表玄関と内玄関が近いタイプと表玄関と内玄関が遠いタイプの相違点を見てきた。その結果、表玄関と内玄関が近いタイプは、外壁の構成と建具の種類において同一の材料、意匠で揃える傾向があり、反対に表玄関と内玄関が遠いタイプは、表玄関と内玄関が近いタイプに比べて、外壁の構成と建具の種類において統一はせず、2種類以上の材料、意匠で設計する傾向がある。さらに建具について述べれば、表玄関と内玄関が隣接関係の場合、ほとんどの作品で建具の種類を統一する傾向があり、非隣接関係の場合は建具が異なる傾向がある。

また脱ぎ石や式台、玄関土間から玄関に入るまでの間の建具の有無など住宅内部の装置についても分析を行ったが大きな違いはなかった。

第3章 総括

3-1 各節の分析結果

3-2 内玄関の配置と外観構成との関係

3-3 内玄関の配置の多様化の意味について

第3章 総括

3-1 各節の分析結果

2章の分析では、対象作品数と内玄関を保有する作品の割合、住宅規模別に見る内玄関を保有する作品の割合、内玄関の設置位置、表玄関・内玄関・勝手口の距離関係について見てきた。もう一度結果をまとめる。

2-1-1では、1780例を対象作品数とし、その中から263例の内玄関を保有する作品を抽出した。全体の傾向としては、例外も多いが1916年から1930年頃にかけて減少し、1930年から1940年頃にかけて増加する傾向が見られる。より詳しく見ると、1917年から1921年にかけては内玄関を保有する作品は15%~30%の割合で確認でき、1921年以降は11%以下まで減少する。1930年には3%まで減少するが、それ以降は徐々に増加し、1939年にピークの31%を迎える。その後は再び減少する。

2-1-2では、住宅規模別に内玄関の傾向を分析した。なお、注意点として1930年以前と1941年以降の内玄関を保有する作品数は一桁であり、極端に事例数が少ない年があることに注意されたい。その上で見ていくと、1931年から1940年の比較的作品数が多い年において、内玄関を保有する作品の割合を規模別で見ると大きく3つの塊に分類できた。1つ目は90.00坪以上の塊、2つ目は60.01坪~90.00坪の塊、3つ目は60.00坪以下の塊である。90.00坪以上では60%以上の割合で内玄関を保有しており、60.01坪~90.00坪になると30~60%の割合、60.00坪以下になると25%以下の割合で内玄関を保有することがわかる。また、60.01坪~90.00坪に注目すると1930年以前は内玄関を保有する作品の割合が50%以下であったのに対して、1930年以降は内玄関を保有する作品の割合が60%前後になっている。90.00坪~120.00坪も同様に1930年を境に内玄関を保有する作品数の割合が増加している。この結果より、住宅規模は内玄関の有無に大きく関わる要因といえ、住宅規模が大きくなるにつれて内玄関を保有する割合が多くなり、反対に住宅規模が小さくなれば内玄関を保有する割合が少なくなることがわかる。

2-1-3では、近接室を分析した。全体で見た場合の近接室は、主に家族が使う室が多い。また、1930年以前は近接室に接客室が配置されることはわずかであったが、1931年以降は接客室が近接室になる割合が明らかに増加する。さらに出入口が3つ以上の場合と表玄関と内玄関の2つのみの場合に分けると、出入口が3つ以上の場合には全体で見た場合と同様の変化を示すが、出入口が表玄関と内玄関の2つのみの場合には水廻りに近接する傾向が見られる。

2-1-4 では、表玄関・内玄関・勝手口の距離関係について分析した。表玄関と勝手口の比はほとんど 50%に近い値で一定であり、内玄関は表玄関と勝手口を結んだ間で移動している場合が多い。そのため、表玄関と内玄関、内玄関と勝手口の比を 100%とし、表玄関と内玄関の比の変化について分析した。その結果、1930 年以前は表玄関と内玄関の距離の比がおおむね 30%~60%に収まっていたが、1930 年以降ではこれに加えて、30%以下や 60%以上となる作品も多数見られようになる。つまり、1930 年以前は内玄関が表玄関と勝手口の間付近にあったのに対して、1930 年以降は 1930 年以前のタイプに加えて、表玄関と内玄関の距離の比が 30%以下の表玄関と内玄関が近いタイプ、表玄関と内玄関の距離の比が 60%以上の内玄関と勝手口が近いタイプに分かれ、配置は多様化していくことが分かる。さらに、出入口が表玄関と内玄関のみのタイプを加えると、全体としては 4 つのタイプに分けることができる。

3-2 内玄関の配置と外観構成との関係

3-1 でも少しふれたが 1930 年以降の 2 タイプ（表玄関と内玄関が近いタイプ、内玄関と勝手口が近いタイプ）についてもう一度まとめる（図 3-1）。この 2 タイプの相違点として表玄関と内玄関が近いタイプは、外壁の構成と建具の種類において同一の材料、意匠で揃える傾向があり、反対に内玄関が勝手口に近いタイプでは、内玄関が表玄関に近いタイプに比べて、外壁の構成と建具の種類において統一はせず、2 種類以上の材料、意匠で設計する傾向がある。さらに建具について述べれば、内玄関と表玄関が隣接関係の場合、ほとんどの作品で建具の種類を統一する傾向があり、非隣接関係の場合は建具が異なる傾向にあると言える。

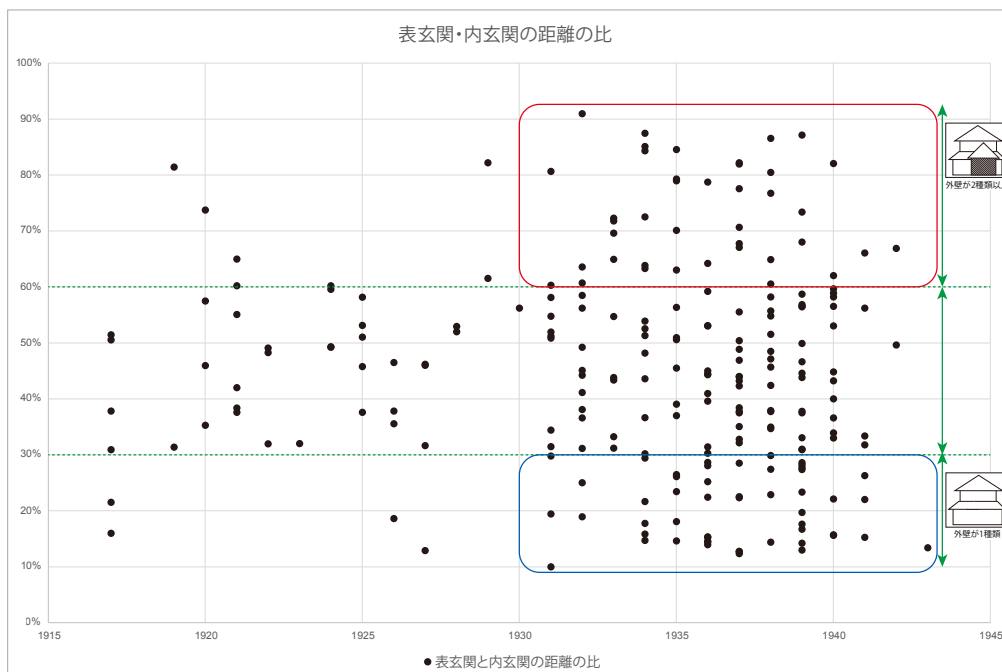


図 3-1.表玄関・内玄関の距離の比

3-3 内玄関の配置の多様化の意味について

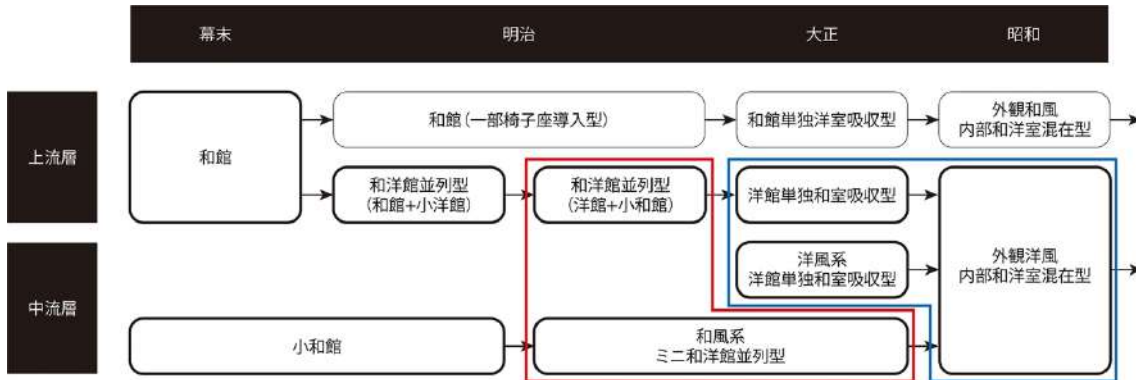


図 3-2.内田青蔵 住宅総合研究財団,『明治・大正の邸宅-清水組作成彩色図の世界』,柏書房,2009年

内玄関の配置の多様化を述べるにあたり、図 3-2 を紹介する。図 3-2 は『明治・大正の邸宅-清水組作成彩色図の世界』に書かれている幕末から昭和にかけての日本の近代住宅の流れを外観構成と起居様式に注目して図に表したものである。この図を使い、1930 年以降の 2 タイプの住宅の位置づけを行う。

図 3-1 の赤枠タイプ（表玄関と内玄関が遠いタイプ）は図 3-2 の赤色で囲ったミニ和洋館並列型の住宅の流れの中に位置づけでき、この赤枠のミニ和洋館並列型の住宅においては、表玄関は洋館に配置され、内玄関と勝手口は和館に配置される傾向がある。また、図 3-1 の青枠タイプ（表玄関と内玄関が近いタイプ）は図 3-2 の青色で囲った外観を 1 種類で構成し、内部に和館もしくは洋館を吸収した住宅の流れの中に位置づけできる。

つまり、内玄関の配置は、外観構成や起居様式と密接に関係しており、表玄関と内玄関が遠いタイプは明治頃に登場した和洋館並列型の住宅の流れで、表玄関と内玄関が近いタイプは、その後、大正に入り登場した外観が洋風の住宅の流れであると言える。

参考文献

- ・『わが国近代の住宅関連書籍に見られる「内玄関」について』
(中村寛子,後藤隆太郎,丹羽和彦 日本建築学会九州支部研究報告 第46号 2007年3月)
- ・『住宅規模を考慮したわが国近代の内玄関の変遷』
(田中希,淵上貴由樹,丹羽和彦 日本建築学会九州支部研究報告 第49号 2010年3月)
- ・『「住宅改良会」の設立について』
(内田青藏 日本建築学会計画系論文報告集 第345号 昭和59年11月)
- ・『「住宅改良会」の沿革と事業内容について』
(内田青藏 日本建築学会計画系論文報告集 第351号 昭和60年5月)
- ・『大正・昭和初期における近代住宅の接客空間の変遷 雑誌「住宅」の記事を事例として』
(藤内雅江,溝口正人 日本建築学会東海支部研究報告書 第48号 2010年2月)
- ・『雑誌「住宅」にみる近代日本の住宅における半屋外空間の変遷に関する研究
(中西麻緒 平成29年度 三重大学卒業論文)
- ・住宅復刻版第1～52巻
- ・内田青藏,『日本の近代住宅』,鹿島出版会,2016年
- ・鈴木成文『住まいを読む-現代日本住居論』,2002年
- ・内田青藏,住宅総合研究財団『明治・大正の邸宅-清水組作成彩色図の世界』
柏書房,2009年

謝辞

本論文を作成するにあたり、ご指導いただきました三重大学 大井隆弘先生、大井研究室のみなさまには感謝の意を表すとともに厚く御礼申し上げます。